

ご存じですか？ こんな文化財⑮

(新潟県)

重要文化財 火炎型土器ほか
(笹山遺跡出土品)

重要文化財 旧笹川家住宅

〈新潟県笹山遺跡出土品〉

笹山遺跡の所在する十日町市は、新潟県の南西部、長野県境近くに位置する。絹織物の産地として全国的に知られ、また日本有数の豪雪地帯でもある。長野県に源を発する信濃川はここ十日町市を貫流し、多くの支流を集めながら遠く日本海へと注いでいる。長野県境から十日町市にかけては、信濃川とその支流のつくりだす河岸段丘の発達がことに著しく、このような地理的環境から、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が数多く存在し



全部異なる文様をもつ「火炎型土器」と「王冠型土器」

整のとれた土器である。この造形美は、世界的に見ても日本の原始美術を代表するものであり、平成四年度にアメリカで開催された「古代の日本」展にも出品され、注目を集めた。火炎型土器は縄文中期中葉に、信濃川中上流域を中心として新潟県および隣県に分布している土器群で、当地域を特徴づけている。笹山遺跡では、これら土器のほか、北陸地方、中部高地地方、東北地方の影響を受けた土器群が見られ、この複合的なあり方が当地方の土器群の特徴となっている。このことはいかに相互の地域的な交流が深かったかを物

ている。

今紹介する重要文化財の出土した笹山遺跡は、その内の一つで、信濃川右岸段丘上、標高一八〇メートルの緩やかな傾斜面に立地する。昭和五十五年から六十一年にかけて、十日町市教育委員会により発掘調査が行われ、広さ約三万平方メートルの縄文中期の大集落であることが判明した。全体の約三分の一が発掘調査され、百二十八軒もの住居跡が確認されたのははじめ、多数の埋蔵、土坑が発見されるとともに、多種多様の遺物が出土した。

このうち重要文化財の指定を受けたのは、縄文中期中葉を中心とした遺物で、総計九百二十八点ある。内訳は、土器類深鉢形土器五十七箇、浅鉢形土器五箇、小形土器七箇、土偶残欠共三十四箇、土製耳飾二十箇、土製円盤三箇、土製三角櫛三箇、石器類石斧四百九箇、石鏃二十八本、石槍残欠共十三本、石鏃残欠共四箇、石匙二箇、磨石・敲石・凹石二百六十八箇、石皿残欠共二十七箇、砥石六箇、石錘一箇、三脚石器六箇、板状石器三箇、剥片石器十箇、石製垂飾三箇、石棒残欠共七箇、軽石製浮子一箇、石製三角櫛一箇、穿孔石製品二箇、ベンガラ塊八箇である。

この中で特筆すべきものは、二十箇もの火炎型土器・王冠型土器である。この二者の名称はその形状から付けられたものであるが、

語るものである。

これらの土器のほとんどは、煮炊き用に使われており、煤や炭化物の付着しているものが多い。「火炎型土器」「王冠型土器」も例外でない。

石器では、打製石斧・磨石類が多く、石鏃類は少ない。また、三脚石器、板状石器はこの地域に特徴的に見られるものである。土偶のうち一辺五センチくらいの小さい三角形の形状で、片面に刺突や沈線で人体を思わせる紋様を描いているものは、信濃川流域を中心として、新潟以北の東北地方日本海側に分布しているもので、強い地域性をあらわしている。

このように、笹山遺跡出土の一括品は、日本の縄文芸術を代表する火炎型土器類が今までになく多く出土したこととあわせ、当該期の信濃川流域を中心とした縄文集落のあり方、生活状況を知るうえで極めて貴重な資料といえる。

なお、これら指定された資料は、十日町市博物館（十日町市西本町一 〇二五七―五七―五五三二）で展示、公開されている。

(新潟県教育庁文化行政課)

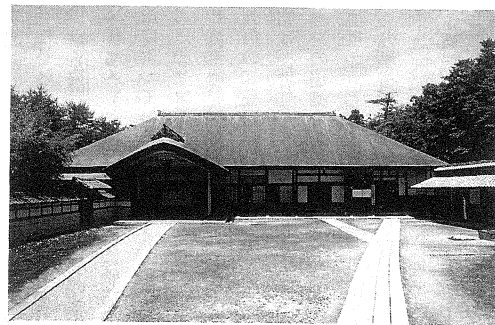
主任調査員 高橋 保

〈旧笹川家住宅〉

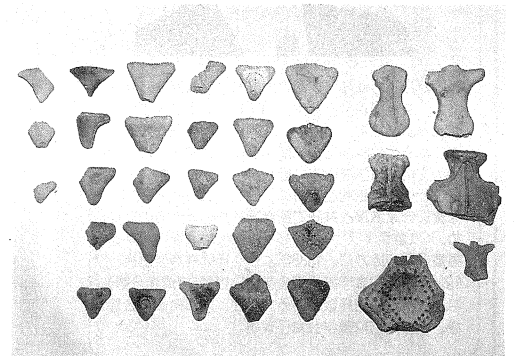
新潟県には、現在四百五十六件の国・県指定文化財が存在している。考古資料の縄文土器とならんで新潟県を代表する文化財として、いわゆる豪農の館として一般に知られる建造物がある。旧笹川家住宅もその一つである。

笹川家は、もともと信州出身の武家の家柄で天正年間（一五七三―一五九一）に越後蒲原郡阿知湯邑（現在の西蒲原郡味方村）に移り、帰農したと伝えられている。慶安二年（一六四九）に村上藩味方組八か村の大庄屋（三千石格）となり、代々世襲してきた。

屋敷は、越後平野の中央部、中ノ口川沿い



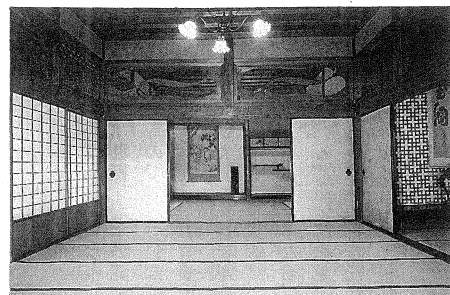
旧笹川家住宅の外観



縄文指定を受けた土偶



茅葺の表門



広々とした表座敷内部

の平坦地にあつて、東西約一五〇メートル、南北約一〇〇メートル、周囲に濠を巡らし、樹木に覆われている。東辺に茅葺の表門を開き、二条の石畳が屋敷中央の主屋へと続いている。庄屋としての役宅である主屋の巨大な表座敷の建物は東面して立ち、その背後の居室部の建物と廊下で結ばれている。居室部から裏門に通ずる道路に、奥土蔵、三戸前口土蔵、飯米蔵、米蔵などが並んでいる。

笹川家住宅は、表座敷(役宅)と居室部(私宅)が別々の建物からなる形式であり、また、多くの付属屋をもつ大庄屋・大地主の屋敷の構えをよく伝えている。

表座敷は、桁行十五間半(三四・三メートル

ル)、梁間七間(一七・六メートル)、寄棟造り、銅板葺(もと柿葺)で、正面に式台、玄関が突き出し、四周に庇がついている。中央部に二十八畳の「大広間」があり、上手に玄関に続く、「三の間」「次の間」が並び、「次の間」の奥に「上段の間」を配し、下手には、「寄付の間」「囲炉裏の間」そして広い「土間」などを配している。「大広間」「三の間」の背後に「御用帖場」・「家老の間」の二室を配している。平面積約五四九平方メートルの広大な建物である。

表座敷の特徴は、規模が大きく、各部分もそれに釣り合つて大きいことである。「大広間」は間四間、奥行三間半の二十八畳、「三の間」は方三間十八畳敷に二間半の大床の構え、「次の間」は十五畳、「上段の間」は方二間半で十二畳であるところを、変形の大きな畳を用いて十二畳・十畳敷としている。居室部は複雑な構成によつてゐる。棟の主体部は東西に走り、桁行十二間半(二六・二メートル)、梁間五間(二三メートル)、寄棟造り、銅板葺(もと柿葺)。これに西端の二階建ての突出部と「仏間」が接続する。

笹川家は、建具も大きく、一般住宅の内法

より、九センチ高い建築当初のものが残つてゐる。「大広間」と「三の間」の境の板戸は、幅一・五九メートルの一枚杉板に砂摺の特別な工法によつてゐる。柱は太く、最も太いもので、三三センチ角である。他は、一八から二七センチ角、座敷廻りの柱は、一七・二二センチ角の二種類がある。

建物は、棟札などから、主屋が文政九年(一八二六)の建築であることがわかる。

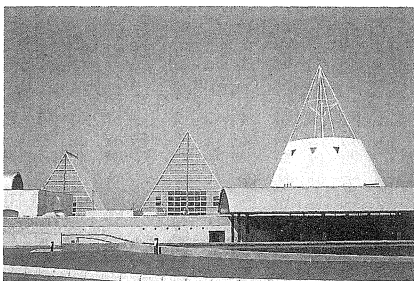
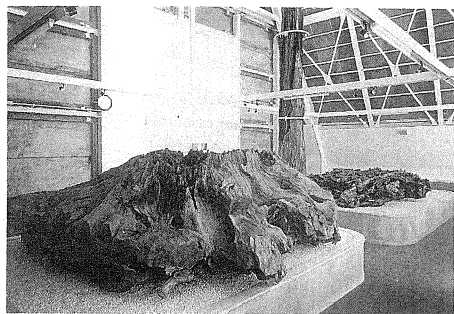
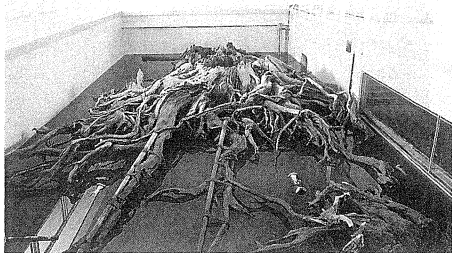
付属屋のうち、表門には寛政十一年(一七九九)の墨書、三戸前口土蔵の中倉に文政三年(一八二〇)の祈禱札、米蔵に慶応三年(一八六七)の棟札がある。文庫・雑蔵・奥土蔵は江戸時代末期で、他は明治時代の建築である。

昭和二十九年に表座敷・居室部・表門・文庫・雑蔵・奥土蔵が、五三年に米蔵・飯米蔵・三戸前口土蔵・井戸小屋・外便所・屋根塀二棟及び宅地一四、五四二・五平方メートルが重要文化財に指定された。

昭和四十五年に宅地建物とも味方村の所有・管理に移り、一般公開されている。だれもが気軽に訪れることができる文化財である。なお、隣接地には、地元出身の曾我量深・平沢興記念館もあり、あわせて見学されたい。

(同主任調査員 竹田和夫)

過去の調査で発見された埋没樹根
(右 乾燥展示、左 水中展示)



＜魚津埋没林博物館＞
魚津市釈迦堂814
☎0765-22-1049
J/R北陸本線魚津駅より徒歩15分
(北陸自動車道魚津ICより車で10分)
休館は12月～3月の毎週月曜（祝日の場合翌日）、
祝日の翌日、年末年始
9：00～17：00（入館は16：30まで）

新の科学的方法が駆使され、さまざまな情報がそこから引き出されている。

現在、魚津埋没林は、平成四年に新しく開館した魚津埋没林博物館（通称、ねっこランド）で過去の調査によって掘りだされた樹根の一部が水中展示及び乾燥展示され、公開・活用されている。また、埋没林に関するこれまでの調査と研究も紹介されている。この博物館では蜃気楼が見える富山湾を目前にひかえていることもあり、最新鋭の蜃気楼発生装置と映像により、その自然が作る不思議な世界を体験できるよう工夫されている。

なお、魚津埋没林は、昭和三十年八月二十二日に特別天然記念物となり、富山県の誇る

代表的な自然遺産として県民に親しまれている。

＜重要文化財 銅造男神立像＞

三千m級の山々が連なる立山連峰は、古くから山岳信仰の山として崇められ、また、奈良時代には万葉歌人の大伴家持の歌に詠まれるなどその雄大で美しい姿は、いにしえより県民のこころのふるさととして親しまれており、現在でも数多くの歴史的遺産が残されている。とりわけ、銅造男神立像は、立山信仰に関する富山県を代表する文化財である。

この男神立像は、もともと立山の頂上に安置されていた「立山神像」と考えられ、明治四年の廃仏毀釈によって久しくその所在が不明となっていたものである。

その発見の経緯は、昭和十五年に重要美術品に認定された愛知県某寺所有の銅像が関係者の目にとまってその所在が明らかとなり、その寺の住職が富山市の美術商から買い求めたものであることが判明した。その後、多くの関係者の尽力により昭和四十二年に約百年ぶりに富山県に還ることとなった。

銅造男神立像は、二段になった台座の上に立つ高さ四十九cmの神像である。五角形の冠帯を前て結んだ流麗な線の衣服、上に反りあげた靴が中国風でその姿は帝釈天に似ている。また、胴体と腕の部分とを別々に型でおし

ご存じですか？ こんな文化財⑨

(富山県)

特別天然
記念物
重要
文化財

魚津埋没林 銅造男神立像

富山県は本州日本海側の中央部に位置し、雄大な立山連峰と清流と名水、緑に包まれた平野と神秘的な富山湾など、大自然に恵まれている。また、万葉ゆかりの地として数多くの秀歌が残されているほか、祭りや伝統芸能など県民生活に根ざした特色ある文化が育まれている。これらの地域性を生かして、平成八年には「いのちとくらし」とやまマンガ大絵巻」をテーマとして、第十一回国民文化祭とやま'96が開催されることになっている。

当時の研究をみると、埋没林の成因については地盤沈下説が有力視され、また、年代については、五千年～一万年前のものという学説が公表されている。樹種については、その大部分がスギであり、他はカツラ・ハンノキなどであった。また、樹根を覆う泥炭層からはアカマツ・クリ・トチノキ・ナラなどが見つかっている。これらの研究成果をうけて、土地の沈下を証明する貴重な化石として昭和十一年十二月十六日付けで国指定の天然記念物となり保存されることとなった。

魚津埋没林は昭和五年（一九三〇）に魚津港の修築工事に伴って砂浜を掘削したところ、地表から六十～百十cmの深さの所から多数の巨大な樹根が発見され、広く一般に知られるようになった。また、これを契機として学会でも注目されるようになり、専門家によってその樹種が調べられるとともに、埋没した原因や形成年代など、埋没林に関する幅広い研究が活発になされるようになった。

昭和二十七年（一九五二）には、自然の状態の樹根を見ることができるようになったという地元熱意のもと、指定地の隣接地において樹根の発掘調査が行われた。この時の調査では樹根の下から縄文時代後期とする土器片が発掘され、考古学の立場から約二千五百年前という年代が与えられることとなり、以前の調査で考えられていた年代よりもかなり新しいものという見解が示された。

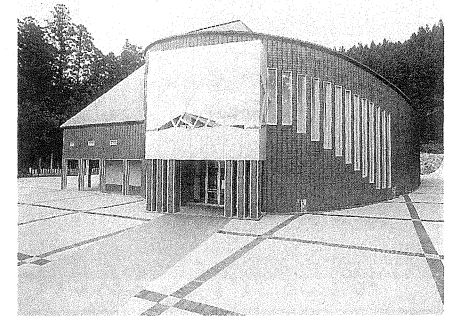
その後さらに研究が進み、昭和四十年（一九六五）には、理科学的な年代測定法である炭素14（¹⁴C）法——生物に含まれる放射性炭素の量を測定する方法——による分析が導入され樹根は約二千年前の産物であるという研究結果が公表されている。なお、近年のより詳細な分析結果によれば、一千三百～一千八百年前という年代が示されている。

さらに埋没林の成因については、埋没林の成育していた時代の気候が寒冷であったことから、現在よりも低かった海面がその後の温暖化で上昇し、その結果として、海中に埋没したという、気候の変化による海面変動説が、それまでの地盤沈下説にかわって提示されている。

魚津埋没林は、約二千年前の日本列島の自然環境や気候の変化について、多くの情報を秘めた貴重な証言者といえる。その時々



数奇な運命をたどった銅造男神立像



組み合わせている。立像正面には「立山神体」、「寛喜二年庚寅三月十一日」、台座の側面に「南州大日本国越中新川郡田寺奉鑄書之」など多くの刻銘がみられる。これらから、立山の御神体であることや新川郡太田寺の僧侶によって鎌倉時代初期の寛喜二年（一二三〇）に造られたことがわかる。この銅造男神立像は霊山の神体にふさわしい清らかな趣きを出し、鎌倉時代の在銘鑄銅像としては古く、中世の立山信仰を物語る貴重な遺品であることから、昭和四十三年四月二十五日付けで重要文化財として国の指定をうけている。

銅造男神立像は現在、富山県（立山博物館）

<富山県（立山博物館）>

中新川郡立山町芦峰寺93-1

☎0764-81-1216

富山地方鉄道立山線千旦駅下車、バスに乗継ぎ雄山神社前下車

徒歩1分 北陸自動車道立山ICから約30分

休館は毎週月曜（祝日の場合、翌日）、祝日の翌日、年末年始

9：30～17：00（入館は16：30まで）

で公開展示されている。この博物館は、かつて立山登拝の宿泊基地として栄えた立山町芦峰寺にあり、立山の自然と歴史を体験的に味わうことができるよう平成三年十一月に開館したものである。以来、立山を訪れる多くの人々の新しい散策エリアとして、人気を博している。展示には文化財の保存に影響がないよう、照明や湿度、展示ケース等に細心の注意が払われていることはもちろんであるが、映像やレプリカ展示の工夫がなされ、博物館を訪れた人々が立体的に観賞できるよう展示されている。

平成三年には大英博物館において開かれた「鎌倉彫刻展」に出展されている。これは、イギリスで開催された「ジャパン・フェスティバル1991」の日本政府協賛の中心行事として、鎌倉時代の彫刻の名品（国宝・重要文化財四十点）を選んで展示したものであり、富山県にある文化財が海外で公開された初めての出来事として、県民の大きな関心を集めた。

（富山県教育委員会文化課

文化財保護主事 押川恵子）

石川県

真脇遺跡全景(中央右よりの水田部分)



史跡 重要文化財 重要無形文化財 輪島塗 真脇遺跡及び出土品



はじめに

本州のほぼ中央部、日本海に面して位置する石川県は、古くより我が国の東西両文化が交差する回廊としての役割を担いながら、個性豊かな歴史・文化を形成してきた。

また、冬の季節が長く、雪に閉ざされる生活は、家内制手工業を発達させ、多彩な手づくりの技の文化財を継承、錬磨してきた。

こうした本県の特徴を代表する文化財として、真脇遺跡と輪島塗を紹介する。

〈真脇遺跡〉

真脇遺跡は、奥能登の富山湾に面した内浦海岸東部の三方を山に囲まれた入江

●真脇遺跡へは、のと鉄道「縄文真脇駅」より徒歩3分。出土品は隣接する真脇遺跡展示室で公開。(9:00~16:30、年末年始、旧盆を除いて開館) イベント等の詳しい問合せは下記へ。

能都町教育委員会生きがい学習課

☎0768-62-2100

〈輪島塗関連展示施設〉

●石川県輪島漆芸美術館 ☎0768-22-9788

●輪島漆器資料館(下記協同組合内)
上記施設のほか、重要有形民俗文化財に指定されている「輪島塗の製作用具及び製品」については、輪島漆器商工業協同組合内(☎0768-22-2155)へ。

の沖積低地(海拔六〜二メートル)に立地する縄文時代の集落遺跡である。

従来は、能登の海岸部に多い奈良・平安期の土器製塩遺跡と考えられていたが、耕地整理工事に先立って行われた分布調査で縄文土器片等が発見され、昭和五十七年から二年間にわたり発掘調査された。

その結果、縄文時代前期初頭から晩期末までの約四千年間にわたって営まれた長期定住型の集落跡であることが明らかになった。発掘調査されたのは、水路付替え部分となった一千三〇〇平方メートルにも満たない面積であったが、地下一〜四メートルの間に、各時期ごとの文化層がサンドイッチ状に整然と堆積しており、遺物包含層の厚さは最大三メートルに達した。この限られた調査区から、遺物箱(バンケース)にして約一千五〇〇箱分の土器・石器類が出土したほか、多数の植物遺体及び動物遺体が検出されている。

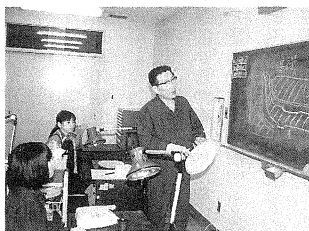
特にとめどなく湧きでる地下水により守られた前期〜中期初頭層からは、他に例をみないトーテムポール状の彫刻柱(長さ二五〜センチメートル、最大径四五センチメートル)、木製大皿、櫓、編物、縄などの植物質遺物とともに、おびただしい量のイルカ骨などの動物遺体が発見

石川県

輪島塗の製作用具および製品



丹念な手作業を重ねる人間国宝、塩多慶四郎氏



石川県立輪島漆芸技術研修所の講義風景（講師は塩多慶四郎氏）

いわけて行う下地法、また碗の縁など、特に丈夫さが求められる部分に檜皮箆で生漆を塗る地縁引きなど輪島独自の技法があり、百数十回を超える丹念な手作業を重ねることで、漆器の品質と堅牢さを高めている。

木地製作、漆塗り、蒔絵や沈金による加飾と工程が多く複雑に分かれる輪島塗では、各工程及び業種間の分業が伝統的に行われてきた。①碗木地、②指物、③曲物、④塗師、⑤沈金、⑥蒔絵、⑦朴木

地、⑧呂色の八職で、これら八職を代表する職人・作家と学識者によって輪島塗技術保存会が結成され、重要無形文化財「輪島塗」の保持団体に認定されている。

また、「輪島塗の製作用具及び製品」(三千八〇四点)が、重要有形民俗文化財に指定されている。輪島漆器商工業協同組合が多年にわたり収集したもので、木地関係、塗師関係、加飾関係の製作用具を各職別に収集分類するとともに、製作にあたった職人の衣食住の生活用品及び早くから北前船による海上交通や「碗講」(年賦販講)組織を利用して販路の拡大に努めてきた販売関係用具を収めており、輪島塗の全貌を知る構成となっている。さらに輪島塗を含む「能登の漆掻き及び加賀能登の漆工用具」(二千四五点)が重要有形民俗文化財に指定されており、輪

島塗の特色を把握するのに見過ごせない資料となっている。

全国の有名な漆器産地が、廉価で大量生産が可能な化学塗料を使いたいというゆるプラスチック漆器製造に転換してゆく中で、輪島では、かたくななまでに伝統の手法を守り、磨きぬかれた職人の技を今日に伝えるとともに、沈金技法の前大峰氏、髹漆技法の塩多慶四郎氏の重要無形文化財保持者(人間国宝)をはじめとする多くの優れた漆芸家を輩出し、日本を代表する漆器産地となっている。

また、重要無形文化財保持者の技術伝承者養成施設として石川県立輪島漆芸技術研修所(大場松魚所長)が設置され、伝統的漆芸技術について加飾、素地製作、造型やデッサンなど幅広く後継者養成事業が行われ、すでに多くの優秀な漆芸技術者を養成し、各地に送り出している。

さらに平成三年に、日本唯一の漆芸を専門とする美術館として石川県輪島漆芸美術館が開館。輪島塗を中心とする古今の漆芸品の展示・収蔵など、総合的な漆文化の情報収集と発信基地を目指した活動が期待されている。

(石川県教育委員会文化課 課長補佐 谷内尾吉司)



鳥形土器(縄文前期)



イルカ骨の出土状態(前期層)



土製仮面片等(縄文後期)

され注目を集めた。イルカ骨は、調査区でも海岸部に近いところに、足の踏み場もないような状態で出土をみており、第一頸椎骨等の集計から二八五頭以上に達することが確認されている。イルカ層は調査区の外に広がっており、さらに遺存状態は悪いが中期や後期の層からもイルカ骨が出土していることから、長期間にわたってイルカの捕獲が行われていたことが知られる。イルカに象徴される豊かな海の幸が、長期にわたる定住を可能としたのであろう。

出土した土器は、縄文前期

から晩期までの北陸で知られるすべての土器型式を網羅し、層位学的方法で編年整理できうる全国屈指の資料として、縄文土器研究に大きな成果をもたらした。

また、土器圏の異なる東北地方や関東・中部高地、近畿地方などの土器の存在は、その交流圏の広さから、縄文人が決して閉ざされた民でなかったことを示すとともに、海上交流の拠点としての能登の役割をはたしたか原始にさかのぼって再認識させるものであった。

この他、後期初頭の土製仮面(土面)や、晩期前半を中心とするクリの大木(直径一メートル)を半裁し円形に立て並べた環状木柱列など、多彩な出土品や特筆すべき遺構が発見されている。

約三万七千平方メートルの規模を有する真協遺跡のうち、発掘調査されたのは、わずか三パーセントにすぎない面積であるが、そこから得られた情報は、従来の縄文時代に対するイメージを一新させるものであり、私たちの縄文文化の見直しを迫り、その内容の豊かさを語りかけてくれるものであった。平成元年に国指定史跡、平成三年に出土品一括(二一九点)が重要文化財となっている。

現在、遺跡を活用した町おこし事業が

進められている。遺跡周辺には、真協遺跡公園が整備され、縄文温泉などが人気を集め、今後、展示館等が整備される計画である。また、真協縄文火祭や縄文粘土を使った一億人の足跡づくりなどのソフト事業も定着化している。

〈輪島塗〉

石川県は我が国でも有数の伝統工芸県である。中でも漆器は全国第一位の生産高を誇り、主に輪島市、金沢市、山中町で生産されている。金沢漆器は加賀蒔絵の伝統に基づく加飾技法、山中漆器は精緻なロクロ技法、そして輪島漆器は入念な漆塗り技法にそれぞれ特色をもつ。

輪島塗の起源については、大陸渡来説、根来塗伝播説、合鹿碗発展説など諸説があるが、いずれも確証がなく定かでない。近年周辺の遺跡発掘調査で、輪島塗特有の地の粉(珪藻土)を使用した漆器が発見され、その製作は平安時代までさかのぼるという推測もある。

輪島塗の他の産地にみられない主な特色として、入念な塗上げ工程があげられる。地元産の樺やアテを使った木地の外側や上縁など損傷しやすい箇所へ麻布をていねいに貼る布着せ、地の粉を粗より細へと順次、生漆と調合して三段階に使用

福井県



一乗谷朝倉氏遺跡全景

特別
史跡
国宝

一乗谷朝倉氏遺跡 明通寺二重塔



〈特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡〉

一乗谷は、福井市街の東南約一〇キロメートルに位置し、足羽川の支流一乗谷川が形成する狭い谷間にある。戦国大名朝倉氏の城館とその城下町として知られ、応仁の乱に乗じて朝倉孝景が越前一国を統一してから義景までの五代約百年間、一乗谷は越前の政治・文化の中心として栄えた。しかし、天正元年（一五七三）義景が織田信長に滅ぼされると、一乗谷は土に埋もれて田畑となってしまった。それから約四百年後の昭和四十六年に国の特別史跡に指定され、主要部分が公有地化されたのを契機に史跡公園をめざし

- 一乗谷朝倉氏遺跡へは、ＪＲ北陸本線福井駅から浄教寺・鹿俣行バスで「朝倉館前」下車。出土品が展示されている県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館は、遺跡から徒歩で15分。詳しい問い合わせは、同資料館（☎0776-41-2301／ＪＲ越美北線一乗谷駅下車徒歩3分）または、一乗谷朝倉氏遺跡保存協会（☎0776-41-2330）。
- 明通寺へは、ＪＲ小浜線小浜駅から池内バスで「門外」下車、徒歩20分。詳しい問い合わせは下記へ。
明通寺 ☎0770-57-1355

て本格的に発掘調査・史跡整備がはじまると、戦国時代の城下町が再び地上に現われてきたのである。

朝倉氏は谷の入り口と中央部付近の狭くなったところに下城戸・上城戸を築き、谷の東側の山裾に館を構え、館の周りには家臣の武家屋敷や寺院、さらにそれらを支える職人や商人を住まわせて城下町を建設した。朝倉館の背後の山上には、山上御殿と堀切や畝状縦堀に守られた大きな山城が築かれている。

朝倉館は東を除く三方に濠と土塁を巡らし、その規模は濠も含めて約一二〇メートル四方になる。内部は常御殿・主殿を中心に会所や茶室など晴れの建物群、台所・厩・蔵など日常生活を支える建物群など合わせて一七棟から成り、その構成は『洛中洛外図屏風』に描かれている「細川管領邸」に似ている。

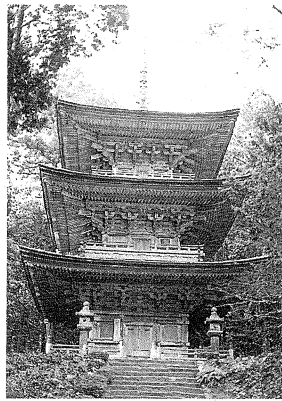
朝倉館のまわりには南陽寺のほか、義景の母や側室の館と伝えられる中の御殿・諏訪館などが存在し、これらには立派な庭園が残っていて、国の特別名勝に指定されている。直立する石組みを多く用いた力強い湯殿跡庭園や、四メートルを越す豪快な滝副石のある諏訪館跡庭園には、戦国大名の気概が感じられる。

福井県

国宝本堂に安置される本尊薬師如来坐像をはじめ、脇侍の隆三世明王と深沙大將と、また持仏堂に安置される不動明王



塔初層の内部に安置される釈迦三尊



明通寺三重塔(国宝)

いる。現在は真言宗御室派に属するが、古く大同元年(八〇六)征夷大將軍坂上田村麻呂が創建したと縁起に記され、平安末・鎌倉初期には国衙の祈禱所となり、鎌倉・室町時代を通じて幕府の崇敬を受けた由緒ある古刹である。

この明通寺の来歴については、同寺所蔵の古文書、

元暦二年(一一八五)の明通寺住僧観西申状(『小浜市史』)に、「為酬蝦蟇國之菩提」とあって、田村麻呂が蝦夷征伐で殺戮した者の菩提を弔うために建てたと記されている。

国宝本堂に安置される本尊薬師如来坐像をはじめ、脇侍の隆三世明王と深沙大將と、また持仏堂に安置される不動明王

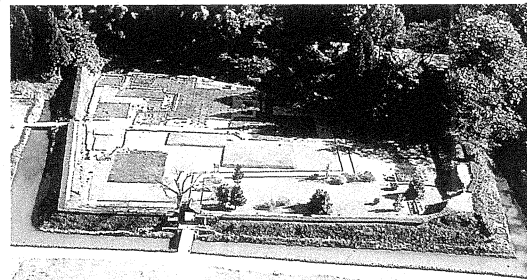
の四体は、いずれも平安時代の後期の仏像で、重要文化財に指定されている。また、江戸時代初期に模写された「彦火火出見尊絵巻」(小浜市指定文化財)三巻を所蔵している。

この「彦火火出見尊絵巻」は、大和絵の最高傑作として有名な「国宝伴大納言絵詞」やボストン博物館の「吉備大臣入唐絵巻」とともに、松永庄新八幡宮にあったことが「看聞御記」で知られており、古代以来伏見宮領であった松永庄は畿内の文化を受け入れてきた重要な土地柄でもあった。

境内の奥まったところに建つ三重塔は、文永七年(一二七〇)に建てられたもので、本堂の建築年代の正嘉二年(一二五八)より一二年遅れて完成をみたものである。

三重塔の外観は、初層平面方三間(四・一八メートル)、高さ約二二メートルの檜皮葺の建物である。一丈寸法は、初重を五寸三分とし、以下上層へ上るに従って五厘ずつ落し、また、初重は中央間を十支、脇間を八支とし、上層へいくに従って中央間を二支、脇間を一支ずつ減少させている。

内部は、初重に四天柱を立て、天井は折り上げ小組格天井とする。心柱は、第



朝倉館全景



紺屋の内部



一乗谷の町屋群

また、一乗谷川をはさんで西側の山裾には重臣の武家屋敷が並んでいて、面積は一八〇〇平方メートル前後もあり、土

塀を巡らしそれぞれ立派な門を構えている。これらは主屋と台所・蔵、使用人小屋、厩などから成っており、茶室や庭園を有する屋敷もある。この地区は、三〇メートルを基準とした町割(都市計画)がなされていたことが、南北方向の道路に直交する道路の間隔や武家屋敷の間口からわかった。

一方、朝倉館から北西に位置する地区には山裾に沿って寺院が多く配置され、後の寺町の様相を呈している。また、一乗谷川寄りでは幅八メートルの幹線道路に面して間口六・九メートルの小規模な屋敷が並び、その中には越前焼きの大甕をいくつも並べた紺屋をはじめ念珠挽・鋳物師・検物師など遺構や出土遺物から職業がわかる家もある。商品を並べた店や職人の家々が軒を連ね、当時の賑わいがよみがえってくるようであり、焼けた医学書のほか匙・乳鉢などが出土した医師の屋敷もあった。

一乗谷の発掘では、百万点を超す遺物が出土している。そのうちの九割が陶磁器で、青磁の花生や唐物の天目茶碗・茶入のほか、明りをとった灯明皿、碗・皿類の飲食器、越前焼の甕や壺

などから構成されている。残りの一割が漆器や桶・下駄などの木製品、釘や飾り金具などの金属製品・バンドコ(「行火」)や鉢・石臼などの石製品である。こうした多様な遺物から、茶の湯・生花など文化面だけでなく一乗谷で営まれた生活を具体的に知ることができる。

三〇年近い発掘調査の成果は、平成七年に完成した「ふるさと歴史の広場」に集約されている。それは、発掘された遺構を基礎として武家屋敷や町屋を含めた「通り」が立体的に復元され、建物の内部には出土した遺物やその他の資料による生活復元も行われている。なお、復元の基になった出土品は、遺跡とは少し離れた安波賀町にある「一乗谷朝倉氏遺跡資料館」に展示されている。

(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 主任文化財調査員 岩田 隆)

〈国宝 明通寺三重塔〉

福井県福井市南地方、若狭の中心地小浜は、古来より都と大陸を結ぶ日本海側の要路として早くから開かれた土地で、各時代にわたって極めて多くの文化財が所在する。その小浜市の市街地から東方へ七キロメートルの松永谷の奥まったところに国宝の明通寺三重塔と本堂が並び建つ

二層から立ち上がっている。四面の中央間を幣軸構付の板扉とし、脇間は連子窓を設け、円柱上に三手先斗拱を組み、二軒繁垂木の軒を支えるなど、様式的にもよく整った和様で優美な落ち着いた建物となっている。初層には、鎌倉時代後期に造像されたものと見られる釈迦三尊を正面(東面)に安置し、背面(西面)に阿弥陀三尊を須弥壇上に安置している。

小浜市内には、この明通寺三重塔・本堂のほか、鎌倉時代後期の前身堂を利用して室町時代前期に再建された妙楽寺本堂や、鎌倉後期に建てられた神宮寺仁王門や室町時代前期の文安四年(一四四七)に建てられた羽賀寺本堂、また、昨年の保存修理によって延徳元年(一四八九)に完成したことが判明した飯盛寺本堂さらには天文二年(一五五三)に建てられた神宮寺本堂があり、また近くの高浜町には中山寺本堂があり、鎌倉時代から室町時代にかけての中世寺院建築が八棟も集中して残っている。また、これら建築物のほかに、重要文化財に指定されている平安時代の彫刻が数多く所在している。若狭は文化財の宝庫なのである。

(小浜市教育委員会)

文化課課長補佐 杉本泰俊

ご存じですか? こんな文化財——③

(山梨県)

特別名勝 富士山
国 宝 大善寺本堂

河口湖から見た夕暮富士

考えられています。

第一段階で五合目の小御岳神社付近、第二段階で古富士火山、第三段階で現火口付近から何回となく噴出を繰り返し、現在の姿になったものと言われています。

現火口以外にも、中腹に宝永山などの側火山があり、ほとんど玄武岩質の岩石で形成されています。

この流動性に富む溶岩は、裾野の傾斜地に厚く堆積しており、地元では、この溶岩流を狐の尾のように末太になっているため、丸尾と呼んでいます。剣丸尾、青木ヶ原丸尾などが代表的な丸尾です。この溶岩流が、「せのうみ」と呼ばれていた湖を精進湖と西湖に分割したり、多くの洞穴や溶岩樹型を生成したのです。

富士山原始林(ツガ、コメツガなど)は、丸尾に生成した森林で、南アルプスなどの森林とは異質の様相を示しています。特にハイマツの分布が見られないのは特筆すべきでしょう。中腹には天然記念物「躑躅原レンゲツツジおよびフジザクラ」群落も広がっています。山中湖村の天然記念物「山中のハリモミ純林」は、鷹丸尾の溶岩流上に孤立して発達したもので、他に類例がなく学術上きわめて貴重なものです。

一方、山中湖、河口湖には、県指定天然記

特別名勝富士山

標高三千七百七十六メートル、我が国最高峰の富士山はその山容も美しく、日本を代表する名勝といつてよいでしょう。

今回は、山梨県側から見た富士山について、その周辺を含めて紹介いたします。

山梨県側の富士は、静岡県側に比べて容姿は峻厳で神々しく、麓の富士五湖からの眺めの他に、三ツ峠や御坂峠、南アルプスから眺めた富士の姿は、侵しがたい雰囲気を持って

います。

昭和二十七年、国は富士山を特別名勝に指定しました。その他、国の指定だけでも、特別天然記念物「鳴沢溶岩樹型」(昭和二十七年三月二十九日指定)があり、また「富士山原始林」「吉田胎内樹型」のほか十三の天然記念物が指定されています。

富士山の山容は、円錐状火山(コニーデ)の標準的な形をしています。単一コニーデですが、三段階の噴出で生成された成層火山と

宮富士浅間神社などを参拝した後、富士に登りました。

今でも富士山には、富士講信者の「六根清浄、お山は晴天」の声が聞こえています。

富士山は、万葉集や竹取物語にも登場しますが、特に太宰治「富岳百景」が有名で、御坂峠には、「富士には月見草がよく似合ふ」の石碑が富士と対峙して建っています。

ほかにも新田次郎や松本清張などが富士を舞台に作品を発表しています。

宝永四年(一七〇七)の噴火以降、火山活動を休止していますが、将来は箱根山のようにカルデラ地形になるだろうと言われていました。一方火山地形のためか崩落が止まず、またオフロード車の侵入による自然破壊や山麓開発が重大な問題となっており、地元関係者を心配させています。

富士山は、自然、歴史、民俗など豊富な内容を持っています。日本人にこれだけ愛されている山もないでしょう。今後も特別名勝として、国民一体となった保護が望まれます。

国宝大善寺本堂

真言宗智山派柏尾山大善寺は、甲府盆地の東端、柏尾山の中腹に位置する古刹です。

寺伝では、養老二年(七一八)行基の開創とされており、九世紀の制作といわれている本尊や、当寺所蔵の建久八年(一一九七)の



富士吉田市忠霊塔より見た春の富士

念物のフジマリモが生息しており、マリモ分布の南限となっています。最近、西湖からもマリモが発見されたと報道されています。

また富士山は修験の山として、平安時代から信仰を集めてきました。江戸時代になると、魚行や食行身祿らにより富士講と呼ばれる信仰集団が流行しました。特に江戸庶民は各地で講を作って、富士塚を築造するとともに、富士を目指したのです。

北麓の登山口のひとつ吉田には、講中宿の御師の家が立ち並んでいます(国指定重要文化財「小佐野家住宅」など)。信者は身体を清め、白装束に杖を持ち、先達に従って北口本

古文書に草創三百余歳とあることから、少なくとも九世紀あたりまで遡り得る古寺です。

本堂は数回焼失したことがあり、現在の建物は、文永七年(一二七〇)の火災の後、弘安七年(一八四四)、鎌倉幕府の強力な支援により再建の工事を起こし、弘安九年(一二八六)に立柱されたことが背面両隅柱の「弘安九参月十六日」の刻銘や古文書により明らかとなっています。

そして五年後の正応四年(一二九一)に上棟、徳治二年(一三〇七)頃ほぼ完成しました。

本堂は、桁行、梁間とも五間の堂々たる建造物で寄棟造、桧皮葺の大屋根をあげています。



大善寺本堂

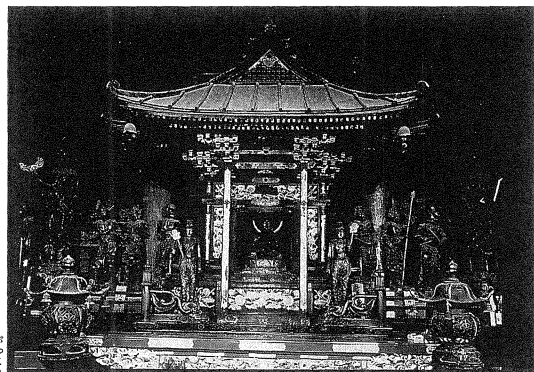
全体に和様ですが、頭貫木鼻や外陣の虹梁が当時伝来した大仏様であるなど、細部に時代の影響が見受けられ、大仏様の細部様式を用いた建築としては、最も東に位置すると言われています。

内部は前方二間通りを外陣、その奥中央の桁行三間梁間二間を内陣とし、周囲一間通りを庇としています。来迎壁の全面には仏壇を設け、厨子を安置しています。厨子は入母屋造の一間厨子で、前方に妻入屋根を繰出し向拝とし、本堂の附指定となっています。

東日本鎌倉時代和様建築の代表作であり、明治四十年八月二十八日国の文化財として指定され昭和二十六・二十九年度に、国庫補助を受けて解体修理を行いました。その後、昭和三十年六月二十二日に国宝に指定されました。

毎年五月八日には、本堂前において「藤切り祭り」という修験道の祭りが行われています。境内に立てたやぐらから、蛇を型取った藤つるをたらし、山伏がこれを刀で切り落とします。この藤つるを持つと、幸運や除災、豊作になるといわれるから、多くの観衆が奪いあいます。その他にも文化財は多く、

〈見学案内〉
大善寺
山梨県東山梨郡勝沼町勝沼3559
☎ 0553(44)0027
JR中央本線勝沼ぶどう郷駅下車、車で5分



本堂内部

本尊の木造薬師如来坐像と脇侍の日光・月光菩薩立像がいずれも重要文化財に指定されています。

桜材、一木造で、平安期のふくやかな姿体を持つ本尊の薬師如来坐像を、地元では「ぶどう薬師」と呼び、ぶどう豊作の祈願に訪れています。勝沼町特産のぶどうの甲州種は、もともと大善寺に薬として導入されたと考える研究者もいます。

県指定文化財では、安元三年（一一七七）以降の七十二点の中世文書が残され、また徳

治二年（一一三〇七）銘の鰐口が保存されています。大善寺庭園は、江戸初期の池泉観賞式の庭園で県指定名勝です。

重要文化財の甲斐勝沼柏尾経塚出土品（東京国立博物館保管）は、大善寺より一キロ東の白山平で偶然出土したのですが、境内にも経塚が存在し、また平安時代の布目瓦が出土しています。そのほか中世墓地として、十三世紀ころの五輪塔群も残されています。

大善寺は、甲州街道沿いにあることから、時代の変遷を見てきました。

天正十年（一五八二）、武田勝頼一行が新府城を自落し落ちのびる途中、大善寺に立ち寄っています。その後大和村田野で自刃、中世以来の甲斐武田氏が滅亡したのです。

また明治元年（一八六八）、戊辰戦争で東進する官軍を、近藤勇を隊長とする新撰組と会津藩兵からなる幕府軍が迎え打った「柏尾の戦い」は、まさに大善寺山門前において行われました。この戦いで幕府軍はあつげなく敗れ、官軍は江戸へ進軍しました。この戦いでは、近郷の民衆が近くの山で見物しており、次代の支配者が誰かを見定めたのです。

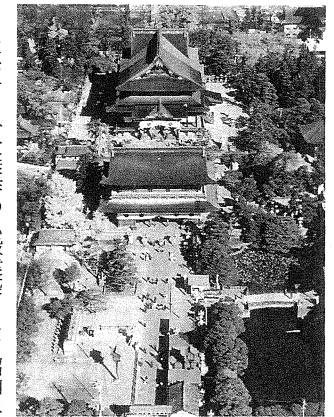
このように、長い年月の中、風雨に耐えてきた大善寺本堂は、これからも多くの人のよって守り伝えて行くことが大切です。

（山梨県教育庁学術文化課主任 武藤 敏）

ご存じですか? こんな文化財— ⑬

(長野県)

国宝 善光寺本堂
特別史跡 尖石石器時代遺跡



T字型の棟をもつ善光寺本堂（奥）

〈国宝 善光寺本堂〉
長野県は、わが国の中央高地に位置し、古くから東西交通のみならず太平洋側と日本海側を結ぶ結節点として多様な文化の交流の場となり、独自の風土と文化を育んできた。そのひとつが、全国に知られた善光寺とそれととりまく文化である。

建築構造の特徴

現在の善光寺本堂は、江戸時代中期、宝永四（一七〇七）年に建造されたもので、日本

における一大傑作の仏殿建築として昭和二十八（一九五三）年に国宝に指定された。その特徴の第一は、柱間で間口七間、奥行十六間の超特大建築であり、その内部の大空間は横約二メートル縦約三二メートルに及んでいることである。この大空間を支えるため目にみえないところに江戸時代の大工らの工夫と建築技術が駆使されている。第二の特徴はこの巨大建築の重量を支えるための基盤工事がしっかりとおり、七・八尺の巨石の上に四尺四方の礎石を据えていることである。第三にはこうした大空間をささえるための工法が採用されていることである。梃子の原理を利用した「はね木」によって前方四・五メートルの張り出し屋根の軒先を支えた。また、天井裏に直径二二センチの大梁を横に渡し、直径六〇センチ、高さ二二・六メートルの柱と虹梁を使用した。こうして、善光寺本堂



全国最大級の木造建築

は、規模・間取り・構造・意匠などいずれの面でも特徴ある方式が採用され、他に例を見ない建造物になっている。

江戸時代の建設経過

江戸時代中期に、なぜこのような全国最大級の木造建築が実現可能になったのか。その第一は、なによりもこの巨大建築の建設工費が、廻国開帳という方式によって全国の民衆からの浄財によって調達されたことによる。元禄五（一六九二）年善光寺大勧進は、建設費捻出のため江戸・京都・大坂の三都での出

大建造物であった。

善光寺信仰の歴史的背景

六年におよぶ全国への廻国開帳によって建造費が調達できたのは、当時の民間宗教の中でも善光寺信仰が広く深く庶民の中に浸透していたからである。このような善光寺信仰が流布した歴史的背景については十分解き明かされているわけではない。これまでの研究によれば、清涼寺式釈迦像と並んで善光寺式阿彌陀像の模造が全国的に流行するようになるのが、平安末期から鎌倉・南北朝時代であること。鎌倉新仏教の宗祖といわれる人々が善光寺信仰を基礎に教線を拡大したこと。鎌倉末期から南北朝時代の善光寺縁起絵が残り重要文化財に指定されていることなどから、中世前期にその信仰が全国化したのではないかとみられている。

(長野県教育委員会文化課 井原亨朝男)

〈特別史跡 尖石石器時代遺跡〉

「右から左へ視界いっぱいにはひろがった八ヶ岳火山群の濃紺のその山頂へまっすぐく褐色にひらかれた道を三三五五。カッコウやツツドリが郷愁のリリックをかなで、冷たい空気は朝のミルクのようでそのなかに鬼つつじの群落の真紅を萌えたばかりの樺や柏の若芽のなかでにじませている。」(略・筆者) 野路は乾



「つみししりつち」

ききつて粉の中を歩くようだが、気にもならない。八ヶ岳の拡大は泥流ファンを縦に幾つかのコンセクエント・リバアがきり開いた幾筋かの長峯状の台地、尖石遺跡はその一つの黄土台地の一部分にある……」

昭和十五年、東京考古学会の十七回例会が尖石遺跡で開かれた際、藤森栄一氏は、会員らと遺跡に向かう様子を「かもしかみち」のなかでこのように述懐している。

尖石遺跡は長野県茅野市豊平東嶽に位置する。遺跡は東西方向に約三〇〇メートル、南北方向に約二〇〇メートルの範囲にあり、標高は一〇六五メートル程である。遺跡のある台地は、豊平と呼ばれ、平坦で幅が広く、ゆるやかな傾斜が続く。

八ヶ岳山麓は、「縄文のふるさと」ともいう

べき、縄文時代前期から中期にかけての遺跡が数多く存在する一帯として、全国的に知られている。尖石はこれらの遺跡のうち、特に中期を代表する拠点集落のひとつと考えられている。昭和十七年に国史跡に指定され、続いて二十七年には「学術上の価値が特に高い」として特別史跡に指定された。さらに、近年の整備計画と合わせて与助尾根遺跡が平成五年に追加指定を受けた。

もともと尖石という名称は、遺跡の南側にある八ヶ岳噴出の安山岩の「とがりいしさま」に由来している。岩の頂部にある溝状の凹みは、縄文時代に砥石として利用されたという説も残り、この地区では信仰の対象として今日に至っている。

尖石遺跡において発掘調査された竪穴住居跡は、現在までに約九十軒ほどある。他に宮坂英次氏が調査した炉跡が五十四か所確認さ



出土品の蛇体把手付深鉢



原始を体験できる復原家屋（与助尾根）

れており、八ヶ岳山麓でも特筆すべき大集落である。遺跡は中期の土器を中心に、祭祀に関連した遺物など、その種類も豊富である。

この遺跡の重要性については中期の大集落跡であるという評価とは別に、学史的意義のある遺跡として名高い。一八九四（明治二十六年）年、小平小平治氏によって初めて遺物の紹介がなされ、一九二二（大正十一年）年には『諏訪市史』編纂に伴い、鳥居龍三、八幡一郎氏らによって発掘調査がなされた。その後の調査は伏見宮博英氏の踏査を契機に、その手伝いとして参加した宮坂氏によって本格化

する。当時代用教員をしていた宮坂氏は、昭和二十年代後半に至るまでの間、私財を投げ打ち、家族を失うという不幸にみまわれながらも、断続的に調査をすすめた。とくに、戦後の与助尾根の調査では諏訪地区の高校生らの協力を得て、住居跡二十八軒を確認した。この調査は、日本で最初に縄文時代の集落を全掘した遺跡として学史に残る画期的なものであったばかりか、その後の縄文時代集落研究に一石を投じることになった。とくに、水野正好氏は、集落構造と祭祀形態とを関連づけ、景観的集落の復元研究として当時の学界に新しい示唆を与え、論議を呼んだ。

昭和二十四年に与助尾根に復原家屋が建てられ、昭和五十四年に開館した考古館には八ヶ岳山麓の諸遺跡出土の資料も展示されるなど、尖石遺跡は原始を体験できる場として長い間県民から親しまれている。現在、茅野市教育委員会による整備がすすめられているが、縄文文化を感じ取り、体験できる場として後世に残そうとする計画である。整備に向けての調査が平成二年から継続して行われ、新たに遺跡の概要等が判明しつつある。将来、遺跡を訪れる人々に今以上に親しまれ、語られ、そして守られていくよう、自然と調和した遺跡として今後の整備が期待される。

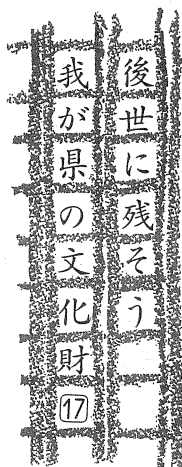
（長野県教育委員会文化課 市村勝巳）

岐阜県



白川村荻町集落を城山より望む

重要伝統的
建造物群保存地区
特別天然記念物
**白川村荻町
根尾谷断層**



重要伝統的建造物群保存地区

白川村荻町

白川村は、岐阜県の北西端に位置し、北は富山県の上平村・平村・利賀村に隣接し、西は白山を経て石川県と境界をなしている。村の面積は三五、六五五ヘクタール、人口は一、八九三人(平成七年度国勢調査)で、面積の九六パーセントを山林が占める典型的な山村である。一月から二月に季節風がもたらす雪は、多いときには四メートルにも達する。荻町集落は村の中央やや北に位置し、緩やかに蛇行する庄川東岸の三日月形をした河岸段丘上にある。また、集落北端から東に入る宮谷川沿いにも集落が延びているほか、

- 白川村へはJR高山本線美濃太田駅から長良川鉄道で美濃白鳥駅下車。JRバス「鳩谷行」で1時間半、「荻町」下車。国道156号沿い。詳しい問い合わせは下記へ。
白川村役場 ☎05769-6-1311
- 根尾谷断層へはJR大垣駅から樽見鉄道で水鳥駅下車。徒歩1、2分。国道157号沿い。詳しい問い合わせは下記へ。
根尾村教育委員会 ☎05813-8-2511

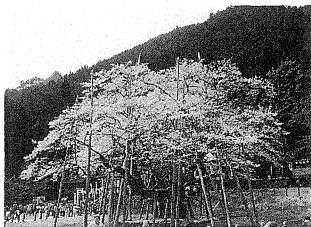
庄川対岸にも一戸だけの地区が飛地となっている。

白川郷は、わが国で最も美しい民家の一つである「合掌造り集落」としてよく知られている。その景観を最もよく伝えている荻町集落では、昭和四十六年十二月に地域住民による「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」が発足し、ついで「住民憲章」が制定され、合掌造りの家屋だけではなく、家屋と一体となって歴史的風致を形成している水田・畑・旧道・山林などの環境も含めた集落全体を保存する運動が地域住民によって展開された。

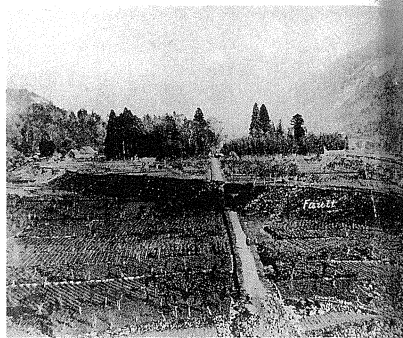
その結果、文化財としての価値を認められた白川村荻町は、昭和五〇年の文化財保護法改正により新たに導入された伝統的建造物群保存地区の制度により、昭和五一年九月、日本で最初の重要伝統的建造物群保存地区の一つとして選定された。さらに平成六年九月に日本政府から「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として富山県の五箇山とともにユネスコに対し世界遺産一覧表への記載が推薦され、平成七年十二月に日本で六番目の世界遺産となった。これまでに日本政府から推薦した記念碑的色彩の強い文化遺産と異なり、山間地の一般民衆が育んできた文化財が

岐阜県

樹齢1500余年とされる淡墨ザクラ(天然記念物)



姿で残されてきている。この断層崖は、「水鳥の断層崖」とも呼ばれ、断層をはさんで約三メートル横へずれ、東側が垂直に約六メートル隆起してできたものである。これほどはつきりとした断層崖は珍しく、この写真が広く国内外に紹介され、



根尾谷断層崖

四五九戸である。この数字からも濃尾地震がいかに大きなものであり、甚大な被害をもたらしたかをよく知ることができる。この地震は、福井県池田町野尻から南東へ岐阜県可児市帷子までの約八〇キロメートルにわたってのびる根尾谷断層が活動したために起こったものであり、このとき、根尾村水鳥地区に北西から南東方向に約一キロメートル以上にわたって生じた断層は、「根尾谷断層」として昭和二年に天然記念物、昭和二十七年には特別天然記念物に指定され、

今もなお当時とほぼ同様の姿で残されてきている。この断層崖は、「水鳥の断層崖」とも呼ばれ、断層をはさんで約三メートル横へずれ、東側が垂直に約六メートル隆起してできたものである。これほどはつきりとした断層崖は珍しく、この写真が広く国内外に紹介され、

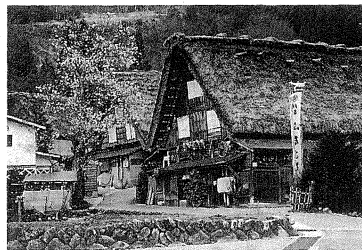
たものであり、最も古いとみられるものは一八世紀中期から後期と推測される。荻町集落には五九棟の合掌造り家屋があり、荻町城跡のある集落北側の城山に登ると集落が一望できる。平成七年一月に国の重要文化財指定を受けた和田家住宅をはじめとする合掌造り家屋が妻を並べて林立する景観には圧倒されるものがある。合掌造り家屋は、国内の他の地域に発達した茅葺き屋根をもつ民家と異なり、大規模な平面をもち、技術的工夫が必要な茅葺きの切妻屋根とし、妻に開口部を設けて採光、通風をはかり積極的な小屋裏を活用している。このことは日本の中の地方にも見られない極めて特異な形態であり、合理的な民家の形態をもつという点でも価値が高い。多層式の小屋裏構造をもつ大規模な合掌造り家屋を生みだし普及させた要因としては、桑の集積や蚕の飼育のための広い空間を必要とする養蚕や箔硝生産が考えられる。現在、合掌造り家屋を公開している施設として、白川郷各地の離村民家を展示保存するため昭和四十七年にできた野外博物館「合掌造り民家園」がある。しかし、世界遺産となった白川郷の合掌造り集落は地域の人々の生活する場そのものである。人類共通の遺産となった白川郷の合掌造り集落が、ここを訪れる多くのの人々に愛され、感動を与えつつ末永く保存活用されることを願ってやまない。

(岐阜県教育委員会文化課 課長補佐 高橋信行)

〈特別天然記念物 根尾谷断層〉

岐阜県北西部に位置する本巣郡根尾村は、北に白山信仰の霊山として知られる能郷白山を頂き、村の中央を清流根尾川が流れ、老樹樹下有名な「根尾谷淡墨ザクラ」のある緑豊かな自然に恵まれた山村である。そして、同村には、大自然の動き・地震の爪痕を目の当たりにできる世界的にも有名な特別天然記念物「根尾谷断層」がある。

明治二十四年(一八九一)一月二八日午前六時三十七分、東海地方を激しい揺れが襲った。濃尾地震である。地震の規模はマグニチュード八・〇。内陸直下型地震としては、有史以来最大の規模であった。この地震による被害状況を簡単に述べると、震源に近い根尾村では、死者一四五人、全戸数一、三一九戸のうち八戸を残して全壊したと記録されている。また、東海地方で最も被害の大きかった岐阜県では、死者四、九〇〇人、負傷者一万三、七六二人、家屋全壊五万戸、半壊三万三、



昔ながらの家並でいまでも生活は営まれている

多くの合掌造り家屋の多くは江戸時代末期から明治時代に建てられ



人類共通の遺産となったことの意義は大きい。白川郷荻町集落の自然環境を守る会発足二四年後のことである。

荻町集落の伝統的建造物群の主体をなすものは合掌造り家屋であり、それに加えて合掌造りを改造した家屋、非合掌の伝統的家屋、これらの附属建物である便所、板倉、稲架小屋、宗教建築などの建築物一七棟及び八幡神社の石鳥居や本覚寺の石垣、明善寺の石段など七件の工作物で構成されている。さらに環境を構成するものとして、八幡神社社叢、明善寺や本覚寺、和田家や長瀬家の生け垣、集落内に巡らされている水路など八件が環境物件として保存の対象になっている。保存地区内の合掌造り家屋の多くは江戸時代末期から明治時代に建てられ

日本でも地震に関心がもたれるようになり、本格的な地震の研究が開始されたと言われる。また、断層崖の典型的な事例として教科書にも引用され、広く知られるようになった。

さて、近年、文化財の保護・保存と並びその公開・活用が重視されるようになったが、平成三年一〇月二八日が濃尾地震の一〇〇周年に当たり、根尾村ではその記念事業の一つとして地震断層観察館の建設を決定し、平成四年には地下観察館を、平成五年には地震資料館を完成し、文化財の積極的な活用が踏み出した。

この地震断層観察館の地下観察館は、現存する水鳥の断層崖の南東端に、断層崖の地下断面が見えるように一辺がおよそ二〇メートルのほぼ正方形の敷地を掘削し、地表下八メートルまでの地層断面を約四五度勾配の掘削面に露出させ、六メートルも地層のずれを常時観察できるようにし、この壁面が風雨により崩れていくことを防止するための巨大な四角錐の屋根を付けた施設である。この観察館の完成により、根尾村を訪れた人たちは、野外で見られる断層崖に驚き、この地下観察館で地下の様子を直接観察し、この断層の規模や濃尾地震の大きさにあらためて驚異を感じるようになる。また、

隣接する地震資料館では、いろいろな機器を使い、地震の地鳴りや閃光を体感したり、根尾谷の自然や地震の仕組みを映像により観察したり、地震のメカニズムを科学的に学習したりできるようになっている。

平成七年一月一七日に発生した阪神・淡路大震災は、現在もなおその復旧工事が進められているほどの大きな被害をもたらしたものであるが、地震後、根尾村の地震断層観察館への問い合わせが増え、見学者も増加しているという。見学者は、記憶に生々しい大地震と目の前の断層崖、地下の地層のずれから、大自然の動きをより身近なものとして感じ、また、畏怖の念を抱くとともに、地学や地震に関する関心をかき立てられるのではないだろうか。

現状保存と開発という論議の中で建設された地震断層観察館が、今後の地震予知研究等のために大いに利用されるときに、一人でも多くの方に見ていただき、大災害の記憶の風化をくい止め、災害に対する心構えを後世に伝える拠点になるよう願っている。

(同課学芸主事 大橋久也)

静岡県



新居関跡全景



江戸時代の関所風景
(東海道五十三次より)

特別史跡 国 宝 新居関跡 梅蒔絵手箱 (三嶋大社所蔵)

後世に残そう
我が県の文化財 ④

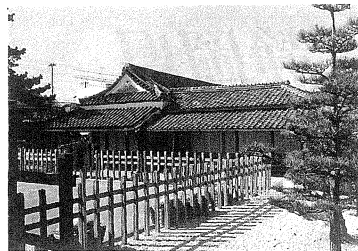
〈特別史跡「新居関跡」〉

「新居関跡」は、東海道新居宿に設けられた新居関所の跡地であり、昭和三〇年八月に国の特別史跡に指定されました。新居関所は今切関所ともいい、徳川家康が慶長六年（一六〇一）に創設したと伝えられ、中山道の木曾福島、東海道の箱

- 新居関跡へはJR東海道線新居駅下車、徒歩10分。詳しい問合せは下記へ。
新居関跡史料館
浜名郡新居町新居1227-5
☎053-594-3615
新居町教育委員会社会教育課
☎053-594-8117
- 三嶋大社へはJR東海道線三島駅下車、徒歩10分。宝物館の開館時間は9:00~16:00。年中無休。問合せは下記へ。
三島市大宮町2-1-5
☎0559-75-0172

根とともに、最も重要な関所として役割を果たしました。関所は、当初、浜名湖口の西の突端で、大元屋敷という地名が残っているところにあり、今切渡船場に隣接していました。元禄一二年（一六九九）に暴風雨と大波により、関所は新居宿とともに、甚大な被害を被り、元禄一四年に元の位置より二町（約二〇〇メートル）ほど西方の藤十郎へ移転しました。そのわずか六年後の宝永四年（一七〇七）、東海地方全域を襲った大地震とそれにもなう大津波があり、関所及び新居宿は壊滅的な打撃を受け、関所を伴って新居宿全体が西隣りの中之郷村弥太郎新田へ移転しました。翌年、普請が成就して、現在も残る新居宿及び新居関所がでさあがりました。元来、これらの関所は、浜名湖に面し、船着場がありましたが、明治以後の埋め立てのため、今では東海道の渡船場に設けられた関所という面影をしのぶことはできません。

現存する建物は安政二年（一八五五）一二月に改築されたもので、間口一一間、奥行三間半の平屋建てです。主屋は、入母屋造り、本瓦葺で東西に長く、上之間、中之間、次之間に分かれ、その背部に御書院間、御用達場、上番勝手台所、及び



当時の面影を濃く残している建物

同心勝手、下改勝手の間が、それぞれ棧瓦葺で三棟付設されていました。このうち御用達場及び上番勝手台所の棟は失われてしまいましたが、主屋及び御書院間、同心勝手、下改勝手は、当時のまま現存しています。大門は、南西向きで、北東は浜名湖に面し、舞阪からの船

校の校舎となり、大正五年（一九一六）までの四四年間、小学校として使われていた。小学校移転後は新居町役場として利用され、昭和二十六年まで町政業務がこの建物内で行われました。現在の関所の建物は、関所廃止から八〇年間で転用されていたため、改造が若干施されており、奥書院についても、内部改造がされていました。

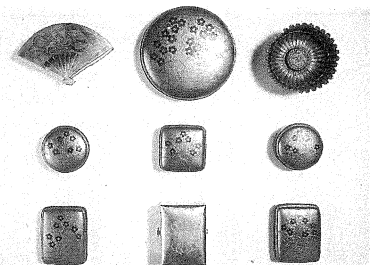
着場が設けられていました。主屋の間と次之間は面番所に当てられ、改めをこの場で主に行いました。また、船会所女改の長屋なども敷地内に配されていました。俗に「入鉄砲と出女」と呼ばれるように、鉄砲、女性の改めは特に厳重であり、また「手負、死人」の改めもありました。

関所の役目は創設当時から約一〇〇年間は、幕府の関所奉行が直接あたっていました。元禄十五年（一七〇二）から三河吉田藩の管理となりました。明治二年（一八六九）、明治政府から吉田藩主に

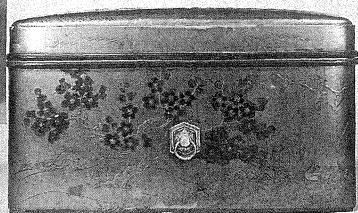
対し、関所廃止の命令が下され、関所はその機能を失いました。建物はそのまま、新政府に移管され、明治六年、新居小学

〈三嶋大社所蔵 国宝「梅時絵手箱」〉
「梅時絵手箱」を所蔵する三嶋大社は、大山祇神と事代主神を祭り、九世紀に「大社」と称されるようになり、一一世紀には伊豆の総社かつ一宮となりました。東海道に要衝に位置していることもあって、中世には隆盛を誇り、一三世紀末に成った『一遍上人絵伝』には一遍が三嶋大社に参詣した様子が多くの社殿とともに詳しく描かれています。

三嶋大社は治承四年（一一八〇）、源頼朝が源氏再興の旗揚げの成就を祈願したこと、以来足利尊氏をはじめ武将の信仰を集めました。そのため、所領寄進状などの古文書が多く残され、また、奉納された数々の刀剣、武器などが神宝として今日に伝えられました。三嶋大社の代表的な所蔵品には、今回紹介する「梅時絵手箱」をはじめとして、源頼朝が自身の病氣平癒を祈願して書写した「般若心経」、十幅の三嶋大社境内図を含む「三嶋大社矢田部家文書」「太刀 銘宗忠」「脇差 銘相模国住秋義作」等の重要文化財があり、このほか応永三十四年（一四二七）に書写された「三嶋本日本書紀」、徳川家光が上洛の際奉納した「太刀 銘平安城住藤原乗則作」、鳥丸光廣が奉納した「紺

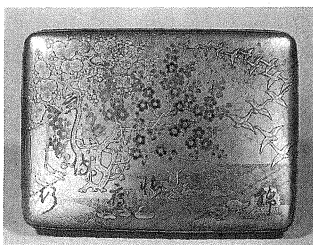


梅時絵手箱に納められている化粧具



鎌倉時代の大形手箱の特徴である高い身

静岡県



初期の歌絵の作例、梅時絵手箱の蓋表面

紙金泥写経」等があります。

さて、国宝「梅時絵手箱」は、縁に錫を廻らした角丸、合口造りの大形手箱であり（縦二五・八センチ、横三四・五センチ、高さ一九・七センチ）、甲盛りは強く胴張りは比較的ゆるく作られています。蓋にたいして身は著しく高く、鎌倉時代の大形手箱の特徴を示しています。蓋の表面には、一方の土手の上に梅樹と几帳を、他方に岸辺に打ち寄せる波と岩を、そして水辺には翼を休める、空には飛び去る雁の群を描いています。この雁には大小の差をつけて遠近感を表しています。ところで、樹の幹や岩に「栄・伝・錦・帳・雁・行」の六文字がちりばめられています。この文字は唐の詩人白居易（白居易）の詩の一節、「栄は錦帳を伝え、花は雪を連ねたり、彩は綾袍を動かし、雁は行を趁う」からとったものです。詩によまれた情景をデザインとしており、歌絵の初期の作例といわれています。

梅時絵の技法としては、沃懸地に梅の幹と八重の梅花、几帳そして雁は高時絵で、波文と鳥毛は付描で、一重の梅花と文字は銀平文で描かれています。平安時代の梅時絵に比べると金粉の種類も多く、各種の技法を駆使した高度な梅時絵技法が認め

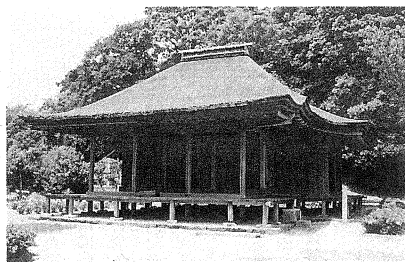
られます。特に高時絵の技法が見られることは、初期の作例として貴重です。また、沃懸地と高時絵の高低のほかに、平文を一段低く嵌め込んでさらに高低をつけており、それによって写実的な表現を目指していることも注目されます。

蓋裏には洲浜に三本の松が見られ、空には雁が群れ飛んでいます。ここでは平目地にして外面の沃懸地と対比させ、洲浜に松・流水・雁などを研出時絵で表しています。なお、身の内には二重懸子とともに、化粧用具一式を納めています。沃懸地に高時絵で梅樹を表し銀平文で梅花を描いた鏡箱一個・歯黒箱二個・白粉箱二個・薫物箱一個、それから梅花文の螺鈿櫛が一八枚あり、また梅花文を線刻した銀軸眉作・銀軸紅筆・銀鈇・銀毛抜・銀簪・銀髪飾四枚がそろい、さらに紙製元結もありです。梅時絵手箱は化粧具のセットがほぼ完備した手箱の最古の例といわれ、風俗資料としても貴重なものとされています。

なお、この手箱は、源頼朝の妻北条政子の奉納になるものと伝承されてきました。内容品にはいづれも使用の形跡は認められず、三嶋大社の祭神に宝物として献上されたものと考えられます。

（同指導主事 田中光夫）

愛知県



金蓮寺弥陀堂

国 宝 金蓮寺弥陀堂 重要無形民俗文化財 三河の田楽 史 跡 大アラコ古窯跡



〈国宝〉金蓮寺弥陀堂
金蓮寺は寺伝によると、文治二年（一一八六）源頼朝の建立と伝えられるが、抛るべき史料を欠き、創立・沿革とも明らかでない。もと真言宗であったが、その後曹洞宗に改められた。
弥陀堂は、鎌倉初期三河国守護安達藤九郎盛長が建てたといわれる七つの阿弥陀堂（七御堂）の一つとされている。鎌倉時代の住宅風仏堂建築として重要な価値をもっているとして、大正九年（旧国宝）ならびに昭和三〇年に国宝に指定された。本県内では最も古い木造建造物で

●金蓮寺弥陀堂へは名鉄西尾線三河萩原駅より徒歩10分。内部の公開は事前申請が必要。詳しい問合せは下記へ。
金蓮寺 ☎0563-32-2063
●三河の田楽に関する問合せは県教育委員会文化財課（☎052-961-2111(内)）へ。
●大アラコ古窯跡へは豊橋鉄道渥美線田原駅から伊良湖行バス「野田」下車、徒歩30分。詳しい問合せは下記へ。
田原町博物館 ☎05312-2-1720

あり、同じく国宝の犬山城天守閣、如庵とともに本県を代表する建造物である。
この堂は、桁行、梁行とも三間、一重寄棟造り、檜皮葺である。東側面後方にある小室と正面の間通りは、すがる破風を用いて庇をのびた形としている。柱は角柱、組物は舟肘木だけであり、いずれも大きな面取りがなされている。軒は二軒であるが、地垂木は繁垂木、飛檐垂木は疎垂木となっている。正面には三間とも部戸が吊られ、側面は前方の間に板戸が設けられている。内部には、中央からやや後退して仏壇が設けられ、木造阿弥陀如来（県指定）一軀が安置されている。天井は折上小組格天井となっており、仏壇の上ではさらに折上げて、二重の折上げとなっている。
建築年代については、指定当時の資料によると、「柱の断面、舟肘木と桁の面さばき、繫虹梁の曲線などは平安末鎌倉初期の風を示しており、少なくとも鎌倉中期以前の造立と認められる。」とされているが、堂の中央の柱が四本の四天柱でなく、二本の来迎柱となり、それがさらに後退している点、腰貫が梁行桁行の両方向に入っている点などの構造様式からもう少し下ると考える説もある。

愛知県

〈史跡 大アラコ古窯跡〉
渥美半島の中央部に位置する同半島最大の溜池である芦ヶ池の西南の、通称大アラコという谷の谷頭に、古窯跡が群を



鳳来寺田楽

三河の田楽基本データ

名称	所在地	公開日	交通	周辺案内
田峯田楽	北設楽郡設楽町 田峯字鍛冶沢	2月11日	J R 飯田線 本長篠駅下車	
鳳来寺田楽	南設楽郡鳳来町 門谷字鳳来寺	1月3日	J R 飯田線 湯谷温泉駅下車	鳳来寺東照宮(国指定) 長篠城跡(〃) 鳳来寺山(〃) 阿寺の七滝(〃)等
黒沢田楽	南設楽郡鳳来町 七郷一色黒沢	1月6日	J R 飯田線 三河大野駅下車	

なつた芸能をもっており、どちらかというと、県境を隔てて隣り合う静岡県県の懐山の「おくない」などの形態に近いものをもっている。(同教育主事 足立泰敏)

田楽として、愛知県を代表する民俗芸能と言える。これらの田楽は「三河の田楽」として、昭和五三年に重要無形民俗文化財に指定された。

田峯田楽 北設楽郡設楽町の田峯観音に古くから伝わる田峯田楽は、観音堂内そのものを田畑の打ち続く野原に見なし、太鼓を観音の田に見たて、その年の豊作を祈願する田楽で、毎年二月一日の朝から夜半にかけて行われる行事である。

祭りの由来は、長祿二年(一五五九)時の城主菅沼定忠が田峯観音の祭礼に神事芸能がないところから、現鳳来町大輪道員津薬師堂で行われていた田楽祭を取り入れたとされている。

この田楽は、大きくは昼田楽、夜田楽、朝田楽に分かれており、昼田楽は、行事初めの儀礼的な神事舞が中心であり、夜田楽は、豊作祈願の田遊びが主体となっている。朝田楽は、屋内から庭へ祭場を変え、農耕が無事終わり、豊作が達成さ

している。昭和三十一年から三十九年に三次にわたって調査が行われ、八基の古窯跡が確認されている。このうち四基については、発掘調査の結果、いずれも全長約一七メートルで窯の中ほどに分焰柱をもつ東海地方通有の竈窯であることが判明した。

これらの古窯跡から出土した主な遺物は、山茶碗・皿・鉢類、壺類である。これらの出土遺物のうちで特筆すべきものは、正五位下行兵部大輔兼 三河守藤原朝臣 顕長」とへうで刻み込まれた陶片である。藤原顕長の三河国司としての在任期間は、いずれも遙任ではあるが、「公卿補任」によって保延二年(一一三六)から久安元年(一一四五)、及び久安五年(一一四九)から久寿二年(一一五五)であることが判っている。大アラコ古窯の操業期間をこの二〇年間に限定することはできないが、平安時代末期の一二世紀中葉に営まれていたことは間違いないし、他の遺物の年代観との矛盾もない。この顕長銘の陶片は大アラコ古窯跡の西方約八〇メートルに位置している平岩一号窯跡からも発見されており、また芦ヶ池周辺に国衙領が存在していたことも指摘されていることから、大アラコ古窯跡をはじめとする芦ヶ池周辺の古窯跡群にお

けた後の村人の無病息災、家内繁盛、厄除け祈願をいろいろな形態で演出している。

鳳来寺田楽 南設楽郡鳳来町の鳳来寺に伝承されている鳳来寺田楽は、寺の本堂下に埋められたと伝えられている鬼を供養するために毎年正月の三日に奉納されているものである。

この田楽は他の田楽とは違い里の人たちが集まって寺のために奉納するものではなく、鳳来寺が扶持を与えた田楽衆に奉仕させて伝承してきたものである。従って里田楽ではなく寺田楽といわれるようになった。

この田楽の形態は、田遊びをとおしての豊作祈願だけではなく、六十余州と国家万民の平安までも祈願するものである。黒沢田楽 南設楽郡鳳来町の峯福寺阿彌陀堂に古くから伝わる黒沢田楽は、毎年正月六日に行われる行事である。

祭りの起源は定かでないが、散楽や田楽能の影響が見られることから、平安時代末期の成立と考えられる。神楽の混入した田楽踊りや、田楽能・猿楽能、さらに田遊びから構成されているが、その中でも田遊び系統の芸能が多く、次第も細かく分かれているのが特徴である。

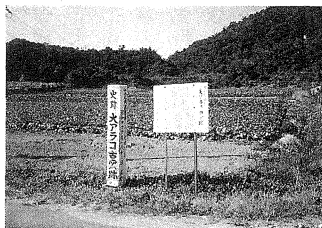
黒沢田楽は、前述の二つとはかなり異なる

ける陶器生産は、国衙の経済活動の一環として営まれていたと考えられる。

ところで、顕長銘を刻した製品(壺)は、静岡県三島市、山梨県富沢町、さらには神奈川県横浜市所在の遺跡から発見されている。また、奥州藤原氏の本拠地である岩手県平泉町の柳之御所跡から出土している多くの渥美窯製品の中には大アラコ古窯の所産と特定できるものがあり、大アラコ古窯製品の需給関係が注目されるところである。

大アラコ古窯跡は、窯体の良好な残存状況や遺物群の資料的価値の高さから、昭和四十六年(一九七二)に国史跡に指定されている。古窯跡は発掘調査後埋め戻され、野菜畑として使用されているが、早期の公有化・整備事業が俟たれる。

(同主査 赤羽一郎)



大アラコ古窯跡の現況

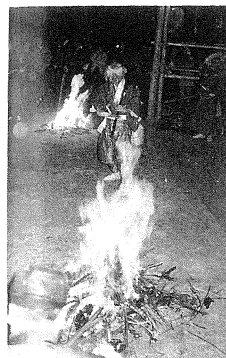


金蓮寺弥陀堂内にある
木造阿彌陀如来坐像

(愛知県教育委員会
文化財課教育主事
安達健治)



黒沢田楽



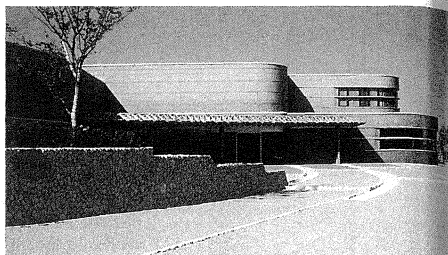
田峯田楽

祭りの起源は定かでないが、散楽や田楽能の影響が見られることから、平安時代末期の成立と考えられる。神楽の混入した田楽踊りや、田楽能・猿楽能、さらに田遊びから構成されているが、その中でも田遊び系統の芸能が多く、次第も細かく分かれているのが特徴である。

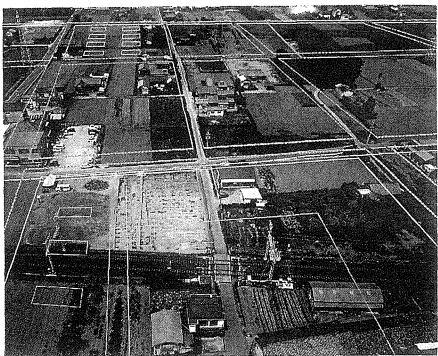
黒沢田楽は、前述の二つとはかなり異なる

三重県

斎宮歴史博物館



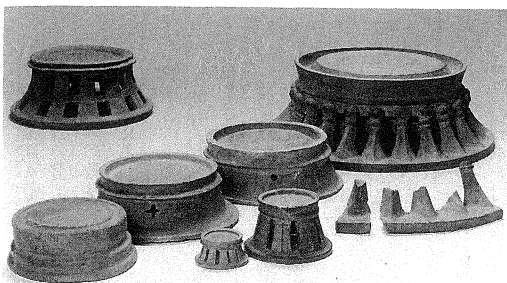
斎宮跡の方格地割と遺構配置



衰退期の平安時代末期から鎌倉時代にかけての遺構は、史跡西部と中央部に多いが、やはり調査が進んでいない。

出土遺物としては、ほとんどを土器類が占め、その九割以上が土師器である。あとは須恵器、灰釉陶器などであるが、緑釉陶器や三彩陶器のほか、ひらがな習書土器、陶硯、石帯、基石

斎宮跡出土遺物



〔史跡 斎宮跡〕
斎宮跡は、伊勢平野南部の松阪市と伊勢市のほぼ中間、多気郡明和町の台地上に広がる面積一三七ヘクタールに及ぶ広大な遺跡である。

斎宮(いつきのみや)は、歴代天皇に代わり伊勢神宮の祭祀を行うために、都から遣わされた皇族の姫君である斎王(いつきのみこ)の御所と、事務を司る斎宮寮からなり、七世紀

国 宝 『西方指南抄』 『三帖和讃』

史 跡 斎宮跡



- 斎宮跡へは近鉄名古屋駅から近鉄山田線で斎宮駅下車、徒歩約15分。史跡は常時見学可能で年間3回の発掘調査中は調査現場も見学可能。史跡内には斎宮歴史博物館がある。問い合わせは同館(☎05965-2-3800)へ。
- 『西方指南抄』『三帖和讃』を所蔵する専修寺へはJR紀勢本線一身田駅下車、徒歩3分。または伊勢鉄道東一身田駅、近鉄名古屋線高田山田駅下車徒歩約5分。境内には重要文化財の御影堂、如来堂などのほか宝物館もある。宝物館見学には書面にて事前申し込みが必要。問い合わせは高田山田専修寺宗務院(☎059-232-4171)へ。

後半から一四世紀前半にかけて存在した。

昭和四五年、現在は斎宮歴史博物館の建つ古里地区に住宅団地開発の波が押し寄せた。この事前発掘調査で奈良時代の土溝や掘立柱建物、蹄脚硯や大型の朱彩土馬など、重要な遺構・遺物が発見され、「幻の宮」と呼ばれた斎宮跡の所在が明らかになったのである。その後の範囲確認調査を経て、昭和五四年三月には国の史跡に指定され、以後斎宮跡解明のため、継続的に発掘調査が行われ、現在に至っている。

斎宮の起源は、記紀によれば崇神朝にまでさかのぼるが、制度的に整うのは天武朝の天武天皇からで、以後、後醍醐朝の祥子内親王まで約六六〇年間存続し、

などの斎宮を特徴づける遺物が多数出土している。ただ、木簡は高燥な台地上の遺跡のため、今のところ出土していない。

そのほかには、土馬、人面墨書土器、ミニチュア土器、小型鏡、馬歯などの祭祀に関係する遺物も多い。

この貴重な遺跡を保存し活用していくため、土地の公有化をはじめとした史跡整備事業を行い、史跡公園としての整備が進められている。

また、調査研究とその成果を広く一般に公開するため、「斎宮歴史博物館」がサイトミュージアムとして、平成元年秋に、史跡西部の古里地区に開館し、多くの見学者を迎えている。

平成一一年度には、開館一〇周年を迎えることから、展示室のリニューアルを予定している。また史跡整備においても、近鉄斎宮駅北側の六・五ヘクタールに、一〇分の一スケールの史跡模型を設置するとともに、体験学習のできるガイダンス施設などを建設することになっており、史跡見学の新しいスポットになる予定



『西方指南抄』

その間に六十数人の斎王の名が残る。

また、斎宮寮は大正元年(七〇一)「斎宮司」として初めてみえ、最盛期の平安時代前期には一三〇の司を擁し、一三〇人ほどの官人と四十数人の女官、雑役人などを含むと五〇〇人を超える大規模な官司であった。

二七一年間に及ぶ発掘調査で、多数の掘立柱建物や井戸、土坑、溝などの遺構を検出し、膨大な量の遺物が出土している。現在までに史跡全体の約一三パーセントの調査が終了し、多くの成果を得てはいるが、史跡全体の解明にはまだしばらくの時間を要しよう。

飛鳥・奈良時代の遺構は史跡西部に集まるが、発掘調査があまり進展しておらず、今のところ不明な点が多い。

一方、奈良時代末から平安時代初期になると、遺構の中心は史跡の中央部から東部の地区に移り、溝と道路で一辺約一二〇メートルの方形に区画された東西七列、南北四列の方格地割が確認されている。

ここ数年の調査でその様相が次第に明確になり、斎王のいた内院など中枢部に迫りつつある。この区画された地域では斎宮寮一三司を示す「水司」「殿司」「炊」「膳」「薬」「寮」などの墨書土器も出土

である。

国 宝 『西方指南抄』『三帖和讃』

今回紹介する、親鸞の筆による『西方指南抄』と『三帖和讃』は、津市一身田町の高田山田専修寺が所蔵する。専修寺は浄土真宗高田派の本山で、全国に六五〇の末寺と一〇万人以上の信徒を持つ三重県内最大の寺院である。

親鸞は建暦元年(一一二一)に越後流罪を許され、関東地方で真宗の教義を確立すると、嘉禄二年(一二二六)に下野国芳賀郡柳島(栃木県芳賀郡二宮町高田)に寺院を建立した。これが最初の専修寺

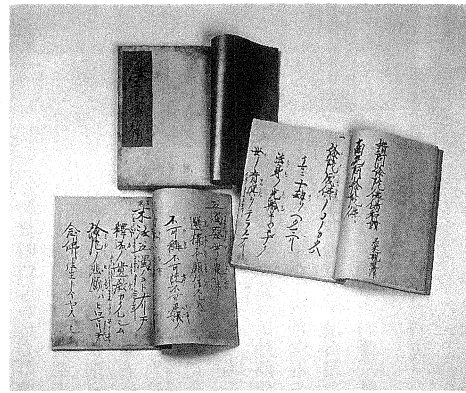
三重県

である。やがて、第十世真慧の頃、東海地方の布教にも積極的な力を注ぎ、寛正六年（一四六五）頃この地方の拠点として、津市一身上に無量寿院を建てて高田の専修寺を移した。真慧の亡き後、高田専修寺に内紛がおこり、さらに火事により寺院が消失すると、事実上一身田の専修寺が本山となったのである。

①『西方指南抄』

さて、この専修寺に伝わる『西方指南抄』とは、親鸞の師、法然上人の「言行録」とでもいうべき書で、上人の法語、

「三帖和讃」



消息、行状等を親鸞自身が編纂し、子細に筆録したものである。

体裁は縦二六・六センチメートル、横一八・〇センチメートルの袋綴装で、上中下各本末の計六冊八九二頁からなる。また各冊の奥書により、親鸞八四歳の康元元年（一二五六）一〇月から翌年正月の間という、わずか三ヵ月ほどで書かれたことがわかる。

本文は片仮名交り文で、一頁六行に記し、漢字にはすべて墨書振仮名が施され、朱書振仮名も交っている。九〇〇頁にも及ぶこの書の筆致は、実に柔軟にして流麗、生命力にあふれる豊かな筆力がある。親鸞は齡八四にして、どのような思いでその筆を運んだのであろうか。そこには朝廷の念仏弾圧による配流の後、再会することのかなわなかった師法然への追慕の念と共に、先師の業績を写し取ることの嬉しさが、彼の心を満たしていたのではなからうか。

この書は親鸞の真蹟のなかでも特に名蹟と称され、専修寺歴代上人により、高田派の正統を証明する至宝として今日まで大切に護持されてきたものである。

なお、附の覚信等直門弟書写本六冊のうち、五冊は親鸞直弟覚信の筆写、一冊

は三世顕智の筆である。

②『三帖和讃』

また、同寺に伝わるもうひとつの国宝に親鸞の作になる『三帖和讃』がある。和讃とは仏菩薩や高僧の徳を和語によって讃詠するもので、平安時代から作られはじめ、鎌倉時代に最も流行した。『浄土和讃』、『浄土高僧和讃』、『正像末法和讃』の三冊からなり、故に『三帖和讃』という。各冊縦二七・〇センチメートル、横二〇・〇センチメートルの袋綴装の体裁をとる。三冊のうち、『浄土和讃』、『浄土高僧和讃』の本文は、真宗高田派の実質上の創設者である真仏が著したもので、彼の書写後に親鸞自身が振仮名や朱筆による圈発点（発音符号）を記し、随所に左訓を施したのもと言われる。

また、『正像末法和讃』は先の二冊とは異なり、もともと親鸞の手許にあった草稿の和讃九首に、さらに真仏が三二首を加えて一冊としたもので、形態上は未完成品と考えられ、この和讃の最初の九首が親鸞の真筆とも言われている。その筆跡は『三帖和讃』を通して、老筆ながら親鸞の人格がにじみ出た味わい深い名蹟と讃えられている。

（富宮歴史博物館普及課 田村陽一）

滋賀県

彦根城跡全景



国宝 彦根城 特別史跡 安土城跡



〈国宝 彦根城〉

一、国宝・彦根城天守ほか国指定建造物
六棟

琵琶湖に望む小高い金亀山に築かれた彦根城は彦根藩井伊家三万石の居城で、天守のほか櫓や門、馬屋などが要所に残っており、城郭としてまとまった姿を今日に伝える数少ない城の一つである。

関ヶ原の戦いで功を成した井伊直政は、慶長六年（一六〇二）、石田三成の居城であった佐和山城に入ったが、直政の子直継は、現在地に城を築く計画を立て、慶長八年、家老木俣守勝の指揮により普請に取りかかることとなった。築城にあ

- 彦根城跡へはJR琵琶湖線彦根駅から徒歩10分。近くには石田三成の居城、佐和山城跡がある。
詳しい問い合わせは下記へ。
彦根市観光課 ☎0749-22-1411
- 安土城跡へはJR琵琶湖線安土駅から徒歩20分。駅前よりレンタサイクルあり。また、近くの関連展示施設に滋賀県立安土城考古博物館、安土町文芸の里「信長の館」、安土町立城郭資料館などがある。
詳しい問い合わせは下記へ。
滋賀県立安土城考古博物館 ☎0748-46-2424

っては、付近の廃城の石垣や建物部材が多量に移されたという。また、幕府より三名の奉行と周辺の七国一二大名が動員され、幕府普請による築城となった。慶長一一年には内堀までの主要郭が完成し、外堀までの城郭全体の完成をみるのは二代直孝の代の元和八年（一六二二）で、着工から二〇年を要する大工事であった。天守の造営は、部材に残る墨書や「井伊年譜」より慶長九年にすでに始められ、同一一年に完成したことが明らかで、この時の大工棟梁は浜野喜兵衛である。なお、同書には「天守は大津城の殿守也」とあり、また昭和三五年の解体修理の調査で彦根城天守は前身建物の部材が多量に転用されていること、また前身建物は四重五階であったことが判明している。天守は三重三階の望楼型で、高さ約二メートルと小規模ではあるが、外観は入母屋破風、千鳥破風、切妻破風、唐破風などを組み合わせた複雑な屋根を構成し、二階と三階に火灯窓、三階に縁高欄を設けるなど変化に富んだ優美な意匠となっている。さらに火灯窓、高欄、唐破風を黒漆塗りとし、金箔を張った鯨や飾金具を取り付けるなど華やかな建物である。

滋賀県

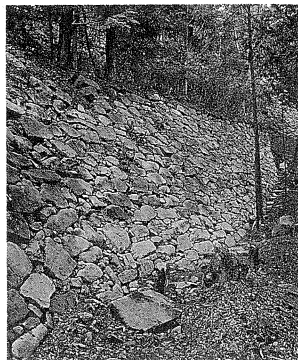
山を天下統一の拠点としたのである。安土城は、「織豊系城郭」のモデルであると同時に、武器としての城から政治的・政策的な道具・シンボルとしての城に転換する、まさにその画期の城である。二の丸跡に信長廟が建立され、「近江名所図会」に描かれるほどの隆盛を誇った摠見寺によって管理され、昭和一五・一六年

衝となるなど、縄張りの妙をみる事ができる。馬屋は、佐和口門の内側から西に延び、さらに南へ折れ曲がる建物で、現存部分は延べ六二メートルに及んでいる。屋根はこけら葺で、内部は二一の馬房からなっている。城郭の附属施設としての馬屋はここが全国唯一の遺構である。なお、平成五年度から西の丸三重櫓及び天守の屋根葺替及び壁の塗替を主とした工事を実施中で、本年一二月末に竣工の運びである。

（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 文化財担当主査 池野 保）
二、特別史跡・彦根城跡
特別史跡彦根城跡の立地する金亀山は、往時は北を松原内湖に、西を琵琶湖に囲まれた要害の地にあった。彦根城は、近世城郭の典型であるが、主郭部分を丘陵上に配し、縄張りには軍事的機能を重視した中世的な手法も取り入れている。史跡の指定範囲は、中堀の内側であるが、幕末の大老井伊直弼が若き日を過ごした埋木舎が取り込まれている。四季折々にその魅力を持つ彦根城跡は、市民の憩いの場として、また、多くの来訪者の訪れる観光スポットとして、今な



安土城跡主郭外周の石垣



複数の郭からなる伝羽柴邸跡



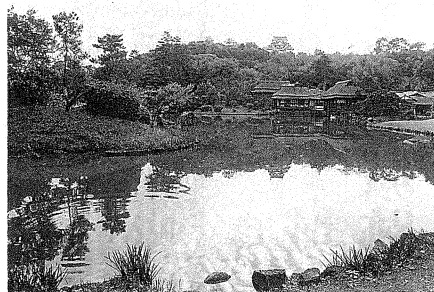
大手門から天主へ続く大手道

度で天主跡、本丸跡の発掘調査が行われたが、九六ヘクトールに及ぶ安土城跡は未だ多くの謎を秘めたままである。そこで滋賀県では、安土城跡の実態を明らかにし、その成果を正しく後世に伝えるとともに活用を図るために、平成元年度から「特別史跡安土城跡調査・整備事業」を二〇年計画で実施している。これまでに、城の骨格である大手道・百々橋口道及び周辺郭群を調査し多くの成果があがっている。ここでは、整備の進む大手道周辺を紹介しよう。

大手門跡から天主に向かって山腹まで約一八〇メートル直進する大手道は、幅約六メートルを測り、両側に幅約一メートルの石敷溝を伴う。山腹からはほぼ直角に西に折れた後、七曲がり状に谷筋を延び、黒金門手前約五〇メートルは再び直線的になる。山裾には雑壇状の複数の郭で構成される伝羽柴秀吉邸跡・伝前田利家邸跡がある。屋敷地内には各郭をつ



長浜城の大手門を移したと伝えられる天秤櫓



文人歌士を招き蒲湘八景になぞらえて園中十景を選ばせた玄宮楽々園



屋根や火灯窓、高欄などの意匠が優美な天守

このほか城内には興味深い建物がある。天秤櫓は、左右に長い櫓の中央に門を開き、両端には二重の櫓をのせて、あたかも天秤のような構造である。高い石垣上に建つ櫓と前方の鐘の丸とは木橋でつながれており、非常時には橋は落とされ本丸を守る要

（同課遺跡担当主査 大沼芳幸）
三、名勝・玄宮楽々園
彦根城の二の丸にある玄宮楽々園は、彦根藩の四代藩主直興により延宝五年（一六七七）から同七年にかけて造営された「楓御殿」の庭園である。藩主が政務を執る場が「表御殿」であるのに対し、「楓御殿」は藩主の家族が生活する下屋敷として利用され、城の北に位置するので「北園」、また古くは「黒門前（黒門外）御屋敷」などと呼ばれた。庭園は大きく二つに分かれ、南に玄宮園、北に楽々園があり、ともに彦根山の傾斜を巧みに利用しながら池庭を作っている。とりわけ玄宮園は広大な面積を有し、舟遊びや庭内の回遊、八景亭の建物からはさまざまな景色の庭を楽しむことができる。また、楽々園は二代藩主直亮が楓御殿の東北に楽々の間を増築して以後そう呼ばれるようになったもので、書院の前に築山をもつ枯山水庭である。（同課文化財担当専門員 長谷川喜和）

〈特別史跡 安土城跡〉

安土町・能登川町の二町に所在する安土城跡は、湖東平野の西端に散在する湖東島状山地の一つである安土山そのもの

なぐ石段や通路があり、建物礎石も良好な状態で残存している。特に伝羽柴邸跡・門跡・主殿跡や伝前田邸内書院造りの奥座敷は考古学・建築史において貴重な資料である。また、伝羽柴邸跡の湧水を利用した水溜遺構とこれを大手道側溝へ流し込む暗渠や伝前田邸跡の三種の木樋を組み合わせた排水施設等、水に関する遺構の検出も重要である。特に木樋内からは漆碗・箸とともにベニバナ・ソバの花粉等も検出し、城内で最も生活臭を感じさせる。

城の前面に引き込まれた街道から眺める大手道や、家臣の屋敷地というよりはゲストハウスのような性格を持つ複郭構造の屋敷地、さらにその延長上にそびえる天主は、それまでの城には見られない構造・規模であり、往来の人々の眼を引きつけたことは想像にかたくない。「見せる」ことが信長の築城政策の一つの鍵なのである。このことは石垣についても同様である。石材の大きさ・形・積み方から石垣を築くこと、あるいは石垣が築かれた場所がもつ機能や城内での意味を考えながら散策するのも、安土城跡を楽しむ一つの方法である。

（滋賀県安土城郭調査研究所

主任技師 小竹森直子）

法界寺は京都の東南、日野の地にある。寺の本尊の薬師如来は、古くから「ひのやくし」として信仰をあつめている。この法界寺にわが国の浄土教美術を代表する国宝阿弥陀如来像と、この像を安置する国宝阿弥陀堂が遺されている。

阿弥陀如来の極楽浄土に往生し、成仏することを願う浄土教の教えがわが国に伝わったのは、奈良時代以前にさかのぼる。しかし、その信仰が盛んになったのは、都が平安京に遷り、末法思想が高まった時期である。永承七年（一〇五二）には、どんなに修行をしても自ら悟りを開くことができない末法の時代に入ると考えられていたのである。その闇から逃れるために、阿弥陀如来に頼って救われることを願う信仰が盛んになった。そこで、天皇家や藤原氏を中心とする平安貴族たちはあらそって阿弥陀如来像を造立し、阿弥陀堂を建てた。平安京をとりかこむ風光明遍な別荘地には、彼らの趣味を反映した華麗な浄土教寺院が建ち並んだ。関白藤原頼通が宇治にもつていた別荘を寺に改めて平等院としたのが永承七年、そこに阿弥陀堂（鳳凰堂）を建て、定朝作の阿弥陀如来像を安置したので翌天喜元年（一〇五三）である。このようにして浄土教の美術、建築は平安の都の文化を代表する遺産となったのである。

ご存じですか？ こんな文化財——①

（京都府）

浄土教文化の至宝

法界寺阿弥陀如来像 阿弥陀堂

法界寺もちょうどその時代、永承六年（一〇五一）藤原氏の一族である日野資業が日野家に伝来した薬師如来像を安置する薬師堂を建立したことに始まる。その後、代々日野一族によつて寺観が整えられていった。現存する丈六阿弥陀如来像もそうした作善の一環として造立されたものであろう。その造立時期については従来から諸説あるが、いずれも

いわゆる定朝様の流れにはいる平安時代後期の彫刻を代表する大作として認めている。広い堂内の中央に小壁の飛天に囲まれて、この像が冥想するように座っている姿は、まさに極楽浄土の教主としての姿そのものである。極楽往生を確かなものにするためには、そのありさまを思い浮かべることができなければならぬという当時の信仰からすれば、この堂内の空間は思い浮かべるべき浄土の景観としてふさわしいものである。

平等院鳳凰堂阿弥陀如来像の作者である定朝は、父の康尚とともに、藤原氏の全盛時代に道長や頼通の身近で活躍した。平等院像の翌年に西院邦恒堂阿弥陀如来像を制作し、後世まで「仏の本様」と仰がれる様式を確立した。その作風は、均斉のとれた身体の比率と、穏やかで柔らかなみをもった面相や身体の質感、よどみのない衣の流れと薄手の材質感など、いかにも自然な軽やかなものである。この感覚は、木材を鑿で彫った彫刻であるということとを忘れさせるほどである。

法界寺阿弥陀如来像は定朝様の作品ではあるが、平等院像と比較すると、面相はより円満になり、目鼻立ちは小さくまとめられ、衣は装飾的な襷を刻む。全体的に平等院像が自然なゆたかりとした流れを感じさせるのにならして、法界寺像はそれを形式的に整えてい

こうとする傾向がみられる。そこに両者のあいだの制作年代の違いをみて、法界寺像は十一世紀末ころの制作であろうとする説が強い。平安時代後期、法界寺には阿弥陀堂だけで三字あり、その他、薬師堂や観音堂、五大堂、弥勒堂がたちならび、壮大な伽藍を構成した。戦乱などでその多くは焼亡し、現在は、阿弥陀堂及び、明治期に復興された薬師堂(本



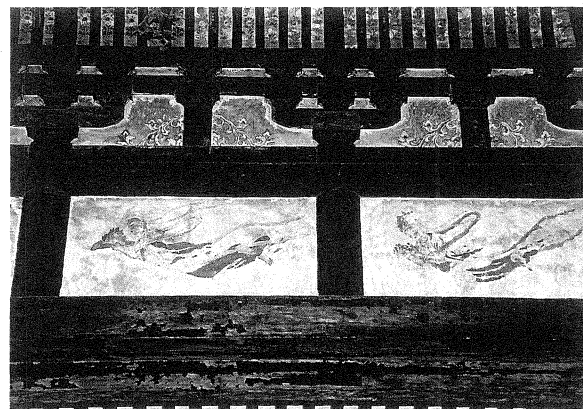
薬師堂



阿弥陀堂

堂、康正二年(一四五六)に大和伝燈寺で建立され、法界寺へ移建された。重要文化財、庫裏が静かな佇まいをみせている。

阿弥陀堂は、方五間、裳階付とする規模の大きい仏堂である。宝形造、桧皮葺で、屋根も勾配がゆるく、やさしく優美な表情をみせている。現在の堂は、安居院の聖覚法印によって再建されたもので、鎌倉前期の嘉禄二



阿弥陀堂壁面

年(一二二六)から嘉禄元年(一二三五)までの間に造営されたと考えられている。ところで、浄土教の阿弥陀堂建築は、次のように大きく分類される。ひとつは、京都市大原の往生極楽院阿弥陀堂(三千院本堂、久安四年(一一四八)、重要文化財)のような、中央方一間に本尊阿弥陀如来を安置する常行堂(一間四面堂)系の形式である。次に、

<見学案内>

京都市伏見区日野西大道町19 ☎075-571-0024
JR東海道線「山科駅」下車 京阪バス(六地藏行)石田バス停下車
徒歩で東へ10分
公開時間は9:00~16:00



阿弥陀如来坐像

京都府加茂町の浄瑠璃寺本堂(嘉承二年(一一〇七)、国宝)のように、阿弥陀如来を九体横に並べる九軀堂の形式があげられる。京都市東山の蓮華王院本堂(三十三間堂、文永三年(一一六六)、国宝)は、この形式の大型化した仏堂である。最後に、浄土曼荼羅にある宝楼閣のような形式、つまり平等院鳳凰堂(天喜元年、国宝)にみられる形式があげられる。

法界寺阿弥陀堂は、このような浄土教建築のなかで、常行堂系の形式を受け継いでいる。様式は、当時中国からもたらされた大仏様などの影響がなく、伝統的な和様でまとめられ

ている。正面の裳階を一段切り上げるという古代寺院仏堂にみられる手法も採用されている。堂内には、内陣を中心に、荘厳が施され、軸部に建築文様、中央の四本柱には金剛界の諸尊、内側小壁には飛天図や发形文様、外側には阿弥陀如来像などが描かれている。

このように、浄土教建築として、伝統的、典型的な一面をもつ反面、多くの者の入堂が可能ないように大型化し、中央内陣の四本柱の柱間が周囲の柱間より広くとられ、柱筋が通らない構造となり、さらには明治の修理まで裳階に設けられていた、参籠のための小部屋

をもつなど、それまでの浄土教建築にない新しい要素が多くみられる。

法界寺阿弥陀堂は、平安時代の浄土教建築の伝統のなかに、新たな時代を感じさせる建築となっている。

多くの美術や建築が遺る京都にあっても、堂とその本尊像がともに国宝に指定されているものは六件を数えるだけであり、法界寺阿弥陀如来像と阿弥陀堂は、その意味でも京都を代表する貴重な文化財であるが、さらに、その規模と質の高さにおいて浄土教文化の至宝といえるものである。

(京都府教育庁文化財保護課技師
熊本達哉、米屋 優)

平成五年一月二十五日現在、京都府内には重要文化財に指定された建造物が二百七十七件五百十五棟、美術工芸品が千八百九十九件所在し、その内国宝は建造物が四十六件五十八棟、美術工芸品が百九十五件である。京都府内には全国の国指定文化財の二割ちかくが集中していることになる。建造物では府教育委員会が所有者から委託を受けて修理工事にあたり、美術工芸品では毎年十件あまりの保存修理や防災設備、収蔵庫建設などの事業が実施されている。

大阪府

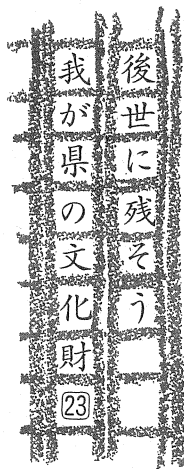


北から見た今城塚古墳。二重の周濠をめぐらせている。

重要無形
文化財

史跡

今城塚古墳 附新池埴輪製作遺跡 人形浄瑠璃文楽



〈史跡〉 今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡

①今城塚古墳

今城塚古墳は大阪府の北部、高槻市郡家新町に所在する前方後円墳で、墳丘の全長一九〇メートル、淀川以北の三島豊能地域では茨木市太田茶臼山古墳に次ぐ大型の前方後円墳である。前方部が発達した形態をとり、前方部前面は剣菱状を呈している。北側くびれ部には造り出しがある。また、二重に周濠をめぐらせており、周濠も含めると、全長三五〇メートルにもなる。築造の時期は埴輪などの遺物からみて、六世紀前半と考えられる。

- 今城塚古墳へはJR摂津富田駅から市バス「奈佐原」行きで「福祉センター前」下車、徒歩3分。
新池埴輪製作遺跡へは同駅から同バス「日赤病院」または「阿武山団地」行きで「上土室」下車、徒歩5分。
詳しい問い合わせは、高槻市立埋蔵文化財センターへ。
☎0726-94-7562
- 人形浄瑠璃文楽が観賞できる大阪国立文楽劇場へは地下鉄・近鉄日本橋駅から徒歩1分。劇場内に展示室あり。
詳しい問い合わせは大阪国立文楽劇場へ。
☎06-212-2531

この古墳は中世に山城として利用されており、それが「今城」の名の由来でもある。山城として利用した際、墳丘に手を加えており、一部には礎石なども認められる。

今城塚古墳の西約一・五キロメートルに「継体天皇陵」とされる太田茶臼山古墳がある。史料によると継体天皇は五三一年に没し、摂津国嶋上郡の三島藍野陵に葬られたとされる。ところが太田茶臼山古墳は五世紀中葉の築造と考えられ、しかもその所在地は古代条里制の研究から嶋下郡であることが判明している。したがって太田茶臼山古墳を「継体天皇陵」にあてることができず、築造年代も所在地も一致し、規模の点でも太田茶臼山古墳に引けを取らない今城塚古墳こそ、真の「継体天皇陵」であると考えられるようになってきているのである。

②新池埴輪製作遺跡

この今城塚古墳所用の埴輪を生産していたのが新池埴輪製作遺跡である。新池埴輪製作遺跡は高槻市上土室にあり、今城塚古墳の西約一キロメートル、太田茶臼山古墳の北約一キロメートルに位置する。

谷に面した標高五〇メートルほどの丘

大阪府

「仮名手本忠臣蔵 城明渡しの段」



寛延元年（一七四八）にかけて、文楽の三大名作である「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」が竹田出雲・並木千柳・三好松洛らによって作られ、芸能の内容も高度になり、演目も整備され隆盛を極めた。

一八世紀後半には、停滞した時期もあったが、文化年間（一九世紀初め）に淡



義経千本桜 進行初音旅

近世芸能としての淨瑠璃を確立した。

人気を博するにつれ、当初人形も小さく一人遣いであったのが、享保一九年（一七三四）に「蘆屋道満大内鑑」で三人遣いとなり、複雑な動きと表現が可能となった。さらに、延享三年（一七四六）か

路島出身の植村文楽軒が「文楽座」を興行し、また勢力を復活、明治時代の中頃に第二の隆盛期を迎える。しかし、映画等娯楽の多様化により、徐々に衰微し、文楽の経営は、明治四二年（一九〇九）に文楽座から松竹合名会社に移る。その後第二次世界大戦の戦禍をくぐり抜け、維持されてきたが、昭和三八年（一九六三）に松竹から（財）文楽協会に運営が移り、現在に至っている。また、昭和五九年（一九八四）に地元の悲願であった国立文楽劇場が大阪日本橋に開場し、定期公演が増え、芸芸員の収入も安定することとなった。なお、文楽の名称は文楽座の隆盛の名残である。

②文楽の現状

文楽は「人形浄瑠璃文楽」が正式名称で、文化財保護法により、昭和三〇年（一九五五）に文楽を行う太夫・三味線・人形の演者（芸芸員）の団体「人形浄瑠璃文楽座」の座員が国の重要無形文化財保持者に総合認定され、現在総員九〇名（太夫二四名、三味線二〇名、人形四六名）のうち四三名（太夫一六名、三味線九名、人形一八名）が人形浄瑠璃文楽座の構成員（一定の技量を体得したと認められた者）として認定されている。また、構成員のうち特に技量の優れた人が重要無形

文化財保持者（人間国宝）として各個認定されている。

現在保持者は六名、太夫の竹本越路大、竹本住大、三味線の鶴沢燕三、人形の吉田玉男、吉田文雀、吉田義助の各氏である。

③運営

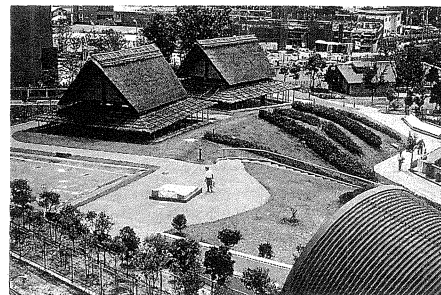
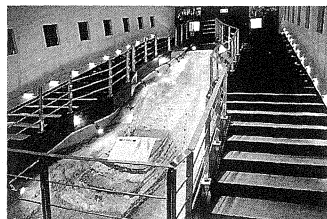
（財）文楽協会は、文楽公演の実施、後継者養成、資料の収集を柱として、芸芸員と契約し、地方公演（三・一〇月）等を実施している。また、研究生制度による後継者養成も行っている。

一方国立劇場（日本芸術文化振興会）は、大阪（一・四・六・七・八・一一月）、東京（二・五・九・一二月）の定期公演を実施。古典の復活や新作の上演など意欲的に事業を行っている。また、後継者養成のため、二年に一度研修生を募集し、文楽関係資料の収集・公開なども行っている。

今後の課題としては、未来のための若いファン層の獲得もさることながら、文楽の後継者（特に太夫・三味線）の養成さらに、人形の頭・床山・衣装、太榊三味線など文楽を支える裏方の技能者の後継者養成と、用いられる資材の確保が急務といえる。

（同課技師 森 成元）

堀輪窯をそのまま現地で公開しているハニワ工場館の内部



整備・公開された新池堀輪製作遺跡

陵の南西側斜面に合計一八基の堀輪窯があり、丘陵上の平坦部には三棟の堀輪工房をはじめ、工人集落と考えられる竅穴住居や土坑が検出されている。

堀輪窯は三つのグループに分かれている。最も南のA群は三基からなり、半地下式構造で、五世紀中葉の堀輪が出土している。このA群の堀輪は形態や調整手法からみて、太田茶臼山古墳に供給されたと推定される。

A群の堀輪窯には三棟の竅穴式の堀輪工房が付属している。床面積が一〇〇〜一四〇平方メートルと大型で、屋根を支える柱は二本を一組として立てており、床面には粘土を詰めた円筒堀輪が埋め込まれていた。

中央のB群は五基、北のC群は一〇基からなり、斜面をトンネル状にくり抜いた地下式構造をもっていた。B群は五世紀後半、C群は六世紀前半の中間葉に操業しており、B群の堀輪は土保山

古墳や二子山古墳に、C群の堀輪は今城塚古墳や屋神塚古墳に供給されたと考えられている。

特に真の「継体天皇陵」とされる今城塚古墳の堀輪を生産したC群は、堀輪窯の数も多く、関東地方の鬼高式土器が出土していることからみても、新池堀輪製作遺跡における堀輪生産の最盛期であったことがうかがえる。

また、胎土分析の結果、奈良県西山塚古墳出土の堀輪が新池堀輪製作遺跡産と報告されている。この古墳が継体天皇の皇后手白香媛の墓に比定されているのは興味深い。

このように新池堀輪製作遺跡では、堀輪窯・堀輪工房・工人集落・供給先を関連づけて把握することが可能で、しかも大王陵古墳に堀輪を供給しており、倭政権の堀輪生産・供給体制を知る上できわめて重要といえるのである。

新池堀輪製作遺跡は平成三年に今城塚古墳の附として史跡指定され、平成四年から文化庁の史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場整備事業）によって整備し、平成七年三月、「ハニワ工場公園」として公開された。

（大阪府教育委員会文化財保護課 大野 薫）

＜重要無形文化財 人形浄瑠璃文楽＞

「文楽」は、歌舞伎・能狂言と並びわが国を代表する伝統芸能であり、大阪が世界に誇る伝統文化である。

その内容は、舞台上の「床」で「太夫」が「義太夫節」を語り、これに太榊三味線の伴奏がのせられる。この音曲にあわせて、三人で遣う人形が、人間にも優るとも劣らない仕草で表現される演劇で、太夫・三味線・人形の三者（芸芸員）が一体となって演じられる古典芸能である。

①文楽略史

文楽の発生は室町時代から江戸時代にかけて、語り物「浄瑠璃」に三味線の伴奏が付き、これに古代からの一人遣いの人形が結びつき演劇として発達したものである。

直接には貞享元年（一六八四）に、大坂道頓堀で竹本義太夫が「竹本座」を開き、作家近松門左衛門の脚本を得て、他の浄瑠璃をしのいで人気を博したのを現在の礎とする。

近松は、実際の心中事件に題材を採った「曾根崎心中」（元禄一六年／一七〇三）など、町の身近な話題を扱った「世話物」という新ジャンルを開拓し、また「時代物」にも多くの優れた作品を発表して、

ご存じですか？ こんな文化財⑭

(兵庫県)

史跡 民俗文化
箕谷古墳群
大杉のザンザコ踊

上空から

箕谷古墳群の概要一覧

古墳名	墳形規模	埋葬施設規模	出土遺物
2号墳	円墳 (m) 12.0×14.0	横穴式石室(無袖) 〔奥行×幅〕(m) 8.6×1.2	耳環3、鉄刀1、刀子1、鉄鏃16、馬具 (鏡板1、杏葉3、鉸具4、草金具17、 円環2、不明金具2)、須恵器43、土師器 4「戊辰年五月□」銘大刀1、直刀2、 鉄鏃3、須恵器3
3号墳	楕円墳 9.5×13.5	横穴式石室(無袖) 9.2×1.2	刀子1、鉄鏃7、須恵器15、土師器1
4号墳	円墳 7.0×?	横穴式石室(無袖) 3.6×0.8	須恵器10、土師器3
5号墳	円墳 6.0×?	横穴式石室 3×0.7?	須恵器2
1号墳	円墳 11×14.5	横穴式石室(無袖) 4.6×1.05	直刀、鞘金具、鞘尻金具、刀子-各1、 須恵器15、土師器5

〔箕谷古墳群〕
箕谷古墳群の所在する養父郡八鹿町は、但馬最大の流域面積をもつ円山川中流域にあつて、氷ノ山に源を発する八木川との合流地点に位置する。箕谷古墳群はその合流点から南西二・五キロメートルの八木川左岸、標高八六メートル前後の丘陵東北斜面に立地する。

なお、箕谷古墳群を理解するうえで欠くことのできない但馬最大の後期古墳群に、東方約四キロメートルの円山川本流右岸に築造された大敷古墳群が知られている。古墳群の中

核を占める継続して構築された四基の大型横穴式石室墳のうちには、箕谷二号墳に並行するとみられる大型方墳のこうもり塚が含まれている。
箕谷古墳群は四基(二・三・五号墳)のまとまった群と、それらから約二〇メートル南西の谷奥に単独(一・四号墳)で立地する五基を呼んでいる。これらの発掘は昭和五十八年に実施されたが、二号墳出土鉄刀に「戊辰年」の銘文が確認されるなど古墳群の重要性が認められ、当初の計画を変更して前者の二・五号墳(小山箕谷二八三)は平成三年に史跡、一・四号墳(小山箕谷二八二)は町史跡(昭和五十九年)に指定されて保存されることとなった。
箕谷古墳群の形成は二号墳から始まり(七世紀第2四半期前葉)、三号墳(七世紀第2四

半期後葉)・四号墳(七世紀第3四半期前葉)・五号墳(七世紀第3四半期後葉?)と斜面地の上方に向かって営まれている。一・四号墳は二号墳とほぼ同時期に築造されたが、群を形成するに至らなかったもので、本来別個の古墳群と見るべきであろう。
各古墳の概要は表のとおりであるが、もっとも重要な点は、二号墳の埋葬状況の認定であろう。報告書によると、第一次埋葬は敷石上に配置され、鉄製武器、馬具、須恵器、土

師器が副葬されていた。一方、「戊辰年」銘大刀は、鉄刀二、須恵器坏身一点とともに第一次埋葬面より七センチメートル上層に配置された、第二次埋葬に伴う副葬品であるとされている。この点については、近年、調査担当者の谷本進氏は但馬地域の須恵器窯の調査・研究などを基準に、報告書にいう敷石上の埋葬は耳環の出土状況を考慮して、七世紀第II四半期前葉の近接した時期における複数埋葬とみられている。また、「戊辰年」銘大刀が上層に置かれていたのは、再利用埋葬(奈良時代後期)に際して床を張った際、敷石上の遺物が整理された結果と考えられるに至っている。すなわち、紀年銘大刀は古墳築造の契機となった被葬者の副葬品と判断されている。

箕谷古墳群の重要性を認識させた紀年銘大刀は、柄の部分が見られ六八・八センチメートルの現存長であるが、元は七七センチメートル程度と推定される。刀身は直刀平造りで細切先に仕上げられている。外装は金銅装の足金物を二個所に拵える横佩の圭頭系大刀に属する。紀年銘は基部の茎に近い棟よりに「戊辰



重文「戊辰年」銘大刀

年五月□」の銘文が銅象嵌されている。紀年銘のある刀剣は我が国において二例目であり、「戊辰年」は六〇八年と考えられている。他の出土品とともに、平成四年度に重要文化財に指定されている。
箕谷古墳群の内容は、但馬地域の後期古墳を検討する際の指標となるばかりでなく、我が国における古墳時代を究明するうえで重要である。(兵庫県教育委員会文化財課 櫻本誠一)

〈大杉のザンザコ踊〉

兵庫県は、ふるくは文化の発信源である京都に近接した摂津、丹波、播磨、但馬、淡路の五国からなり、都の経済を支えた多くの荘園が分布していた。

しかも、西国と京都の文化は西国街道や山陰道を通じて常に交流していた。

こうした兵庫県下には、京都で流行した芸能が流れ込み、各時代の特色を残すものが民俗芸能として層をなして分布している。

とくに中世の都で人々を魅了した数々の芸能は、加東郡上鴨川の住吉神社の神事舞に、猿楽、田楽、王の舞として姿をとどめており、正月の寺院の法会で行われる鬼追も西国街道沿いに広く分布している。近世の芸能としては、伊勢の太神楽系統の獅子舞や因幡地方の影響を受けた麒麟獅子舞も残っている。

このほか、大杉のザンザコ踊のように、中世末から近世初頭の京都で流行した小歌を地にし、色とりどりの衣装を着けた男女が太鼓などの楽器を打ち鳴らしながら群れ舞い踊る風流踊もよく残っており、さながら県土が生きた民俗芸能の博物館となっている。

大杉のザンザコ踊は、兵庫県の北部の養父郡大屋町大杉の二宮神社に伝えられている。

盆もすぎた八月十六日の静かな夏の昼下がり、締太鼓の音が緑に囲まれた村のなかに広がってゆくと、村の老若男女の前で、男たちの勇壮なザンザコ踊の奉納が始まる。

この踊りの由来は、文久元年(一八六一)二月十七日の正垣文書によると、慶安二年(一六四九)に正垣与惣右衛門が伊勢参宮のおり、奈良の春日神社に参詣し、奈良の踊りの手拍子などを習い、太鼓や赫熊(しんぐま)を買って村に持ち帰り、村繁昌のために始めたところ。

また、村の伝えでは、昔「カガミ」という病気が流行した時、村の庄屋が伊勢大神に願をかけ、奈良で習い覚えた踊りを氏神に奉納したことに始まるともいう。大杉に近い若杉のザンザカ踊でも、疫病で村が減ったとした時、大和の修行者が村の若者に踊りを教えて氏神に奉納したことに始まるといい、いずれも奈良の踊りを伝え、疫病を鎮めたという点で共通している。



「ザカ ザン ザン」と激しく踊る中踊

八月十六日の午後、村の公民館で衣装を整えた踊り子は、まず公民館の前で「いりは」を演じ、その足で神社に向かう。

神社の石段にかかると、行列を整え音頭が「雪折れ竹を、よいやと引けば、雪折れ竹を、よいやと引けば、しらげのお米が、降りかかる、降りかかる」と「いりは」を唄い、続いて「おわきやれ、おわきやれ、こなたの御門、おわきやれ、おわきやれ、こなたの御門、お庭を借りてひと踊り、さあひと踊り」と「ゆりこみ」を唄いつつ境内の踊り場に入る。

踊り場に入ると音頭は、境内下手の棧敷に並び、新発意と中踊を真ん中にして側踊三十〜四十人が回りを囲み境内に大きな円陣をつくる。いよいよザンザコ踊の始まりである。

踊りは、袴を着け陣笠姿に緒太草履をはいた新発意が軍扇を持って「東西東西、太鼓頭に側の姫、この新発意が教えおいたる春日殿の踊りなんぞ、中で音頭をとってお囃し申す」と口上をのべると、紋付き袴で一文字笠をかぶった音頭七、八人が手に御幣を持って、

奈良の春日殿の、宮だちゅう、ごろうじゅう、八棟造にやら見事、八棟造にやら

見事

(春日殿踊)

茂りし深山、忍べ分けゆけば、茂りし深山、忍べ分けゆけば、御姫の油火と、細々と見え候、細々と見え候 (沖中踊)

と唄いだす。

この唄と、新発意のリードで「ザカ ザン ザン」と中踊と側踊は太鼓を打つ。この時、中踊はそれぞれ白の筒袖半纏に鶴と軍扇を染ぬいた胸当をし、頭に赫熊をかぶり、五色の大幣を付けた日月を表した二メートル近い大団扇を背中に負って、お互いが向き合ったり、背中あわせに離れたりしながら激しく踊る。側踊りも同じ衣装を着けるが、衣装が足らないとシャツにズボン姿で踊るものもでてくる。側踊は左右に向きを変えつつ踊るが中踊りほど激しくはない。

歌詞は、いりは二種、ゆりこみ、春日殿踊、沖中踊、綾踊、殿御踊、さお踊、貝踏踊、宝踊、お寺踊、長者踊の十二曲があるが、長者

踊は踊らないことになっているので実際は十一曲が踊りとして残っている。

各踊りの最後は「あがり」の一句を唄うが、太鼓は「ザン ザン ザンザカ ザットウーザンザカ ザットウー」という打ち方に変わる。この太鼓の音から「ザンザコ踊」という名称が生まれたといわれている。

大杉のザンザコ踊は、村から踊り場に至る道行から、門懸をへて踊り場で芸能を披露する中世以前からの形態をよく残し、新発意、中踊の他、多くの側踊が出るなど、村を挙げて踊りを奉納する大規模なもので、県下の他の風流踊の規模を越えている。

特に昭和四十八年に国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の選択となつて以後、若者や子供たちの参加を得てますます活動が活発になっている。

このほか、但馬地方には、大屋町若杉、和田山町寺内、八鹿町九鹿、浜坂町久谷に県指定の無形民俗文化財のザンザコ踊が残っている。

夏の暑い太陽が西に静かに傾き始めたころ、鬼踊りともいわれる激しいおどりが終わり、三々五々家路にいそぐ村人の声と足音が境内に響き、村はまた一年後の踊りを楽しみにしつつ日常の生活にもどつてゆく。

(兵庫県教育委員会文化財課 八下降史)

ご存じですか？ こんな文化財——⑥

(奈良県)

特別史跡 平城宮跡
重要無形民俗文化財 春日若宮おん祭の
神事芸能

今、よみがえる平城宮跡

大和平野の北部、奈良旧市街地の西方に、広大な空間が市街地に囲まれて存在する。それが特別史跡平城宮跡である。

平城宮跡は、今から千二百八十三年前の和銅三年（七一〇）に元明天皇によって藤原京から遷都されて以来、延暦三年（七八四）に長岡京に遷都されるまでの七十余年の間、律令国家の中心地として栄えたところである。

その規模は、南北約一、一〇〇メートル、東西は東に張り出した東院を含め約一、三五〇メートル、面積は約一三一ヘクタールに及ぶ。周囲は築地で囲まれ、そこには主要な十二の門が設けられていた。宮跡内には、天皇の即位や外国からの使者の招待などの様々の国家的儀式を行った大極殿や朝堂院の遺構が調査・整備され、奈良時代の政治、経済、社会の動向を知るとともに、宮殿規模の広大さを実感できるようにもなっている。大極殿の背面は天皇の居所（内裏）であり、廻廊や建物の据え柱遺構が検出されている。宮内にはこの他にも皇太子のいた東宮、宮内省・兵部省などの八省の建物が数多く建ち並んでいたものと推定されており、その一部が整備されている。

平城宮跡を語るには忘れてはならないことがある。それは、県下には多数の史跡などがあるなかで、地下遺構の存在するほぼ全域が保存され、このような広大な土地を公有化できたのは先人達の努力の賜物であるということである。

奈良県は大阪・京都などの大都市に近接するという条件の下、昭和三十年代後半からそれら大都市のベクトルタウンとしての大規模な開発が各地で行われた。その結果、奈良市西部の丘陵地などは市街地と化し、大阪などが

ら多くの人々を迎え入れ、全国でも有数の人口急増県となっている。

そのような環境のなかで、近鉄などの交通機関にも恵まれ、また、大規模な造成工事などにも必要としない、奈良県内でも有数の一等地と評価される広大な平城宮跡が保存できたのは、これまで、この地域の保存に尽力した人々の汗の結晶と言っても過言ではない。

江戸時代末期における国学者北浦定政による条坊等の研究・顕彰活動、明治時代に北浦定政の研究を受け継いだ奈良県技師の関野貞、特に忘れてはならないのは旧添上郡東里村の出身者である棚田嘉十郎らによる保存運動であるといえよう（同氏は筆者が在住している地区の著名人でもある）。同氏は明治三十九年（一九〇六）に「平城宮址保存会」を発足させ、献身的な活動により、大極殿跡や朝堂院跡を国へ献納されるという多大なる業績を残した。

その他にも、その意志を受け継いだ「飛鳥平城京保存会」などの活躍により、昭和三十六年（一九六一）に平城宮西南部で計画された検車区設置計画や、その翌年に計画された国道二四号線バイパス計画に際し、世論や国会などに訴え、計画を回避できたことも特筆すべきことである。

なお、本県による公有化の努力が今も続け

な。」との実感が湧く瞬間でもある。

（文化財保存課記念物係長 増田享利）

春日若宮おん祭の神事芸能

奈良市春日野町御蓋山麓の春日大社は、藤原氏の氏神として著名であるが、師走の寒気も厳しい十二月十七日には、「おん祭」と呼ばれる祭礼が催される。この祭礼は、春日大社の摂社若宮社の例祭であるが、本社例祭である春日祭が、格式高い勅祭であったのに対して、若宮祭は大和一国をあげて盛大に執り行われ、広く人々に親しまれてきた祭礼である。社伝によると、平安時代末期の保延二年（一一三六）に、悪疫退散・五穀成就を祈願して時の関白藤原忠通により始められたというから、今年で八百五十八年の伝統を有することになる。祭礼全体は左の通りで、早くから準備が進められる。

七月一日 流鏑馬定

十月一日 御旅所縄棟祭

十二月十五日 大宿所祭

十二月十六日 宵宮詣・宵宮祭

十二月十七日 遷幸の儀・暁祭・本殿祭・御渡式・御旅所祭・還幸の儀

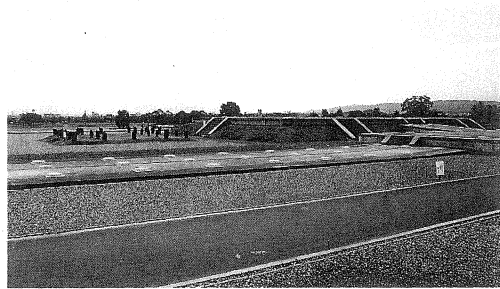
十二月十八日 奉納相撲・後宴猿楽

られていることを付け加えておきたい。

現在、文化庁や奈良国立文化財研究所によって、第二次内裏地区、朝堂院地区、宮内省官衙地区、西南大垣及び泉池、溝、西朝堂兵部省等が、順次計画的に整備を図られてき

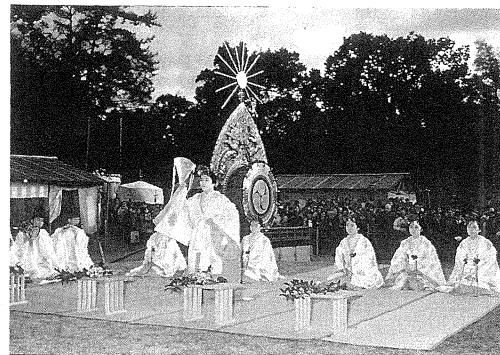


復元された建物



大極殿跡の基壇

このうち、中心的な部分が、遷還幸と御渡りと御旅所祭である。十六日夕刻の宵宮祭のあと、深夜には暗闇の中を淨衣の神人が人垣を作り、オーオーと警蹕を唱えながら若宮神を飯御殿へ遷座する。翌日午後からは、日の使い、馬長児・御巫・田楽・細男・猿楽・大名行列などの衣裳を凝らした一行がこの御旅所へ練り込む御渡りがある。途中、一の鳥居を潜ってすぐの「影向の松」の下では、芸能座はその持芸を披露する松の下式がある。御旅所では、鉦鉦や御染御供など古風な神饌が



御旅所祭（社伝神楽）

献じられ、そのあと社伝神楽・田楽・細男・猿楽・舞楽など多彩な芸能が、芝舞台の上で庭燎を焚きながら深夜まで練り広げられる。すべての芸能が奉納され終わると、丸一日飯御殿に停まった若宮の神は再び暗闇の中、若宮社へ還幸する。

おん祭は、若宮社の祭礼ではあるが、当初から藤原氏の氏寺である興福寺が深く関与していた。興福寺は各種の芸能のうち、特に田楽の奉納を華やかに実施した。中世、大和の地侍が興福寺の衆徒・国民として祭礼を支えるようになると、当時隆盛の猿楽座を率い、また自らは流鏑馬を競って奉納した。つまり、おん祭は、寺院の神事祭礼として始められ、のち大和の武士団がこれを支えるようになったという歴史的経緯をもつ。また祭礼の内容からいえば、御子神（若宮神）を迎え祀るためか、「稚児による祭り」といえる側面も持つが、最も大きな特色が、芸能奉納に主眼をおいた「芸能による祭り」であることである。この祭礼をハレの舞台として時代時代の芸能が華やかな競演を繰り広げてきたのであるが田楽・細男などの芸能は、このおん祭の中でこそ守り伝えられたといえる。祭礼こそ芸能伝承の最もふさわしい場の一つであることを示している。昭和五十四年二月におん祭で演じられる神事芸能と御渡式が重要無形民俗文化財に指定されたことと、昭和六十年の八



松の下式（猿楽）

化財に指定されたことと、昭和六十年の八十五年祭が大きな契機となり、保存継承の気運が高まり、芸能伝承の場はいよいよ確固たるものになりつつある。

（文化財保存課主査 鹿谷 勲）

ご存じですか？ こんな文化財①

(和歌山県)

国宝 長保寺本堂ほか
史跡 徳川家墓所

本堂正面全景

さらに、当時の工匠達は建築技術の技法を模索して、他府県まで出向いていることが、現在に残る古文書や建造物などから伺い知ることができ。

近世には、紀州廻船が交通の役割を果たし、紀伊国屋文左衛門は、紀州みかんを江戸に運び大儲けをした。その大金で吉原で豪遊三昧をしたことは、講談や

小説などでご存知の方もあると思う。

この時期は五代紀州藩主吉宗が、八代將軍となり、江戸のバブル崩壊を立て直すため「享保の改革」を断行した時期でもある。絢爛たる繁栄の後にきた経済破綻の時代、吉宗はいかに生きるか、まさにサバイバル時代であったと思う。今日の世情とあまりにもよく似ている。(NHKの大河ドラマで吉宗の生涯を放映中なのでぜひご覧ください。)

〈国宝 長保寺本堂、大門、多宝塔〉

長保寺は、海軍郡下津町にあり、和歌山市から車で三十分、下津駅から二キロメートルの距離にある。長峰山脈の裾野の小高い斜面

に、国宝及び重要文化財の建築物が建ち並んでいる。

寺伝によると、一条天皇の勅願所として、長保二年(一〇〇〇)に創建し、後一条天皇の寛仁元年(一〇一七)に完成したことが分る。開基は慈覚大師の弟子で、書写山円教寺を創建した性空上人である。また寺の名は長保の年号を賜って寺号としたと伝えられている。その後、仁治三年(一一四二)に西から東に本堂を移し、再び延慶年間に再建されたのが現在の本堂や多宝塔などである。長保寺は、中世の主要建築物が現存する寺として重要である。

宗派については、性空の開基であるので天台宗であるはずだが、その後、何度か転宗している。「長保寺記録抜書」によれば、後法相宗、天台宗、応永の時より真言宗となり、三たび現在の天台宗となったことが分る。

応永二十四年(一四三七)の奥付がある「紀州海部郡浜中庄長保寺縁起」に「当寺は真言秘宗弘傳の靈地、如来密教受持の寺」とあり、高野山真言宗との関係が伺われる。

元和五年(一六一九)に紀州初代藩主頼宣は、駿河から転封、父徳川家康を祀るため、和歌浦東照宮を建立し、別当寺院を天耀寺雲蓋院とした。そして紀州徳川家菩提寺を長保寺とし、寛文六年(一六六六)に、天台宗に

改宗し、墓地面積三四ヘクタールに歴代藩主の廟所を建てた(長保寺境内配置図参照)。本堂は、鎌倉末期の延慶四年(一一三二)再建と伝えられている。本尊は釈迦如来像で、文殊・普賢の両脇侍を安置する。明治三十七年古社寺保存法により特別保護建造物に指定され、昭和二十八年に国宝となった。

構造は桁行・梁間とも五間、一重、入母屋造、向拝一間、本瓦葺の建物である。柱上に棟を付けるなど唐様の手法がみられるが、出入口の幣軸、連子窓・組入天井、欄間・妻飾り等の手法は和様であり、二つの様式をミックスした独自の意匠を模索している。特に計画においては正面外陣の一間を脇間より広くとり、一部を組入天井とする。この形式は、他県ではなく、道成寺本堂、鞆八幡宮大日堂、地蔵峰寺本堂や戦災で焼失した松生院本堂等が同じ様式を持ち一つの紀州式とも言えよう。

大門は「再宮由來写」によって、南北朝末期の嘉慶二年(一一三八)に後小松天皇の勅宣を受け突然僧侶によって建立されたことが分かる。長保寺では、明治三十三年に最初に指定された建物で、昭和二十八年国宝となっている。

構造は、三間一戸楼門・入母屋造・本瓦葺の和様の建物である。門に掲げられている「慶徳山長保寺」の扁額は後小松院御宇妙法院堯

仁親王の真筆と伝えられ、裏面に応永二十四年の刻銘があり、附指定にされている。

また両脇の仁王像は、運慶の子息湛慶の作と言われ、昔の修理の際に銘があったという。

多宝塔は鎌倉末期の造立と推定され、三間

多宝塔・本瓦葺の建物である。康永三年(一三四四)の弘法大師御影堂建立の勅進状に塔の名が記され、すでにこの時には建立されていたことが分かる。構造手法からみて、本堂より少し下と思われる。

塔は全体的に小振りであるが、亀腹は低く屋根のゆるやかな均整のとれた建物である。特に中備に美しい臺股を入れ、内部は力強い折上組天井とする。上層は腰を強く絞り軒が深く和様を基調とした佳麗な建物で、頂部には美しい相輪を建てる。

内部の須弥壇は高欄に網目の巴紋と透彫を施し、腰には唐草彫刻を嵌め込む等、唐様の珍しい手法が取り入れられている。

本尊は金剛界大日如来を安置する。本堂と同じ昭和二十八年に国宝となった。

(和歌山県教育庁文化財課課長 高橋 彬)



山門



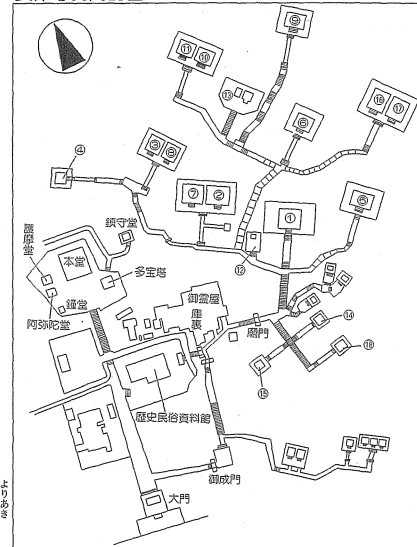
多宝塔全景

〈史跡 和歌山藩主徳川家墓所〉

初代藩主頼宣により寛文六年から七年にかけて建立された仏殿(後の位牌殿(御霊屋))に面する山腹を中心に頼宣以降、將軍となった五代吉宗(八代將軍、十三代慶福(十四代將軍)を除く歴代藩主とその子息・夫人等の墓所が営れ、最後の藩主となった十四代茂承の後、三代の紀州徳川家の当主が祀られている。

国宝の大門をくぐった東側に御成門が西面し、これを入ると御霊屋への参道がのび、その脇に七・八・一〇代藩主の側室等の墓所への参道がわかれている。内御成門ともいふべき門の手前で歴代藩主の墓所への脇参道があるが、現在は廃道同様となつている。内御成門を入って御霊屋の前を通る歴代藩主の墓所へ通じる参道は本堂前の階段下から庫裡へ通じる通路と御霊屋の前で合流している。

長保寺境内配置図



(紀州徳川文化展図録より)

- | | |
|--------|--------|
| ①初代頼宣 | ⑪十二代齊運 |
| ②二代光貞 | ⑫十四代茂承 |
| ③三代綱教 | ⑬十五代頼倫 |
| ④四代頼職 | ⑭七代夫人 |
| ⑤六代宗直 | ⑮七代夫人 |
| ⑥七代宗将 | ⑯十代夫人 |
| ⑦八代重倫 | ⑰十一代夫人 |
| ⑧九代治貞 | ⑱十二代夫人 |
| ⑨十代治宝 | |
| ⑩十一代齊順 | |
- 五代吉宗…寛永寺(東京都)
十三代慶福(家茂)…増上寺(同)

歴代藩主の墓所は御霊屋をみおろす南向きの山腹におよそ三段となつて造営されている。最下段の中央に初代頼宣の墓所が設けられ、山腹に沿つて設けられた参道に面して、右に六代宗直、左に十四代茂承、二代光貞、八代重倫、九代治貞、三代綱教、四代頼職が祀られている。中段に墓所が設けられるに当たつて初代と二代墓所の間に階段がつくられ、その正面に七代宗将の墓所が営まれた。この中



初代頼宣墓碑

十七代頼昭、さらに十一代齊順、十二代齊運が祀られている。七代墓所の左には最上段にただ一人祀られている十代治宝の墓所への階段参道が設けられている。

これら歴代藩主の各墓所は山腹を切込み下方前面に城郭を思わせる石垣を組み、二段(壇)からなる墓域を造成している。下壇正面には門の礎石が残り、上壇中央の階段につづく石畳の墓道がみられる。上壇の中央部には廟門をもつ瑞垣を四方に繞らした一段高い切り石敷の廟所基壇があり、その中央に墓碑を建立している。

灯籠は下壇の墓道の左右に密に並ぶことが多いが、上下壇・廟所基壇の周辺にも立ち並び一定ではない。

墓碑には三形態あり、初・六・七代が無縫塔、二・三・四・九・十四・十五代は扁平角柱、八・十・十一・十二代は八角宝塔の形式をとる。また、墓碑銘は六代までが無銘であるが七代以降は正面に院号と側面に没年を刻んでいる。藩主墓地下段では二・八代、三・九代が、中段では十一・十二代及び十・十一代両夫人の廟所が同一墓域内に並置して祀られている。これは、単独で造営された十代以降、十・十一代両夫人、十一・十二代藩主から同一墓域内に並列合祀する形態が生じたようで、このころ、本来単独墓であつたろう八・九代墓地を二・三代墓地に合祀したものと推測される。

なお、四代藩主までの墓所が描かれている長保寺保管の下津町指定文化財「紙本著色長保寺古図」によれば、初代墓所は下壇の石垣中央に面し一間向唐門を置き、その左右から側面にかけて土塀を築き、門の背後に桁行三間、梁間二間の入母屋造りの参籠所とみられる建物を配している様子が伺われる。

歴代藩主墓所は本史跡のほか、伊都郡高野町高野山に所在する史跡金剛峯寺旧境内奥の院にも営まれているが、長保寺墓所は奥の院墓所のみならず、全国に所在する各藩主墓所に比較しても格段の荘厳さを示しており、徳川御三家の一つとしてその勢力を今に伝えている。

(同課主任 藤井保志)